

田山暦の分類と比較

——絵暦から読み解く生業と信仰——

太 田 原 潤

OTAHARA Jun

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 田山暦は江戸時代後期の絵暦の一種で、日付や暦注も含め全て絵文字で表現された暦である。橋南谿が『東遊記後編』において天明3年（1783）の田山暦を図入りで紹介したことで近世のうちに多くの人に知られ、シーボルトや松浦武四郎らも注目するところとなった。

近世以来、田山暦は文字が読めない人が農作業の目安に用いるための暦であるとの印象が固定化し、その見方は近年の研究に至ってなお見直されていない。従来の研究は暦注の読み解きや盛岡暦との比較に重点が置かれ、田山暦成立の背景や、本来何のために作られた暦であるのかについてはほとんど顧みられずにきた。また、関連資料は蓄積されつつあるものの、それぞれの評価が適正にたされないまま混然と比較研究が進められてきた経緯もある。

本稿では、まず、田山暦の関連資料を網羅的に抽出することを試み、その来歴に基づいて資料を六つの群に分類した。そして、近世の実物資料とそれに準ずる資料を明確にすることにより、田山暦は、「特定暦注優先配置型」の前期田山暦と、「全暦注日付順配置型」の後期田山暦に大別されることを示した。その上で、関連資料との比較を行ったところ、前期から後期への移行の経過や盛岡暦との関係についての新たな見解を得ることができた。

また、田山暦は文字が読めない人が農耕の目安とするための暦とする見方に対しては、伊勢暦との比較から、田山暦は田山の農作業に即したものとはなっていないことを指摘することができ、暦注配置のあり方などから考えると、農耕よりもむしろ信仰、とりわけ庚申信仰と強い関連がある暦であることがわかった。

特に前期田山暦は、庚申の日の視認性を高め、文字が読める読めないにかかわらず庚申の日に関する情報を読み取りやすくする工夫をしたものといえ、文盲の人のための暦という見方も見直しが必要になった。

田山暦が創案された背景には、庚申信仰との関係で既に存在していた盲心経についても考慮する必要があるなど、いくつかの今後の検討課題も明らかになった。

Classifying and Comparing Tayama-goyomi:

——Subsistence and belief seen through Egoyomi (Pictorial Calendars) ——

Abstract : Tayama-goyomi is a type of *egoyomi*, or pictorial calendar, created during the late Edo period, on which all dates and *rekichu* (date annotations) are represented pictorially. These calendars became widely known to the public in the early modern period after doctor/author Nan-kei Tachibana introduced, with illustrations, the 1783 edition of Tayama-goyomi in his book titled “*Toyuki Kohen*.” Historical figures like Philipp Franz von Siebold and Takeshiro Matsuura also

took an interest in the calendar.

The entrenched view that *Tayama-goyomi* were created to help illiterate farmers time their farming activities has persisted since the early modern period, and this view has not changed even in recent studies. Past research on the calendar generally focused on deciphering its *rekichu* or comparing *Tayama-goyomi* with another type of *egoyomi* called *Morioka-goyomi*, with little attention paid to the process behind *Tayama-goyomi*'s development or its original purpose. While a good amount of research materials has been collected, they continue to be used haphazardly for comparative research, and each item has yet to be evaluated properly.

This current study comprehensively gathered information and materials regarding *Tayama-goyomi* and classified them into six groups based on their origins. By separating the original manuscripts dating back to the early modern period from the rest of the materials, our study was able to show that *Tayama-goyomi* can be broadly divided into early and late period works based on how *rekichu* are positioned in the calendar layout. Early period *Tayama-goyomi* emphasize certain *rekichu* over other information, while calendars from the later period feature all *rekichu* arranged by order of dates. Based on this classification, we analyzed the calendars against related materials and gained new insights into the early to late period transitions of *Tayama-goyomi*, as well as its relationship with *Morioka-goyomi*.

With regard to the view that *Tayama-goyomi* were designed to serve as guides for illiterate farmers, our study, through a comparison with *Ise-goyomi*, shows that information depicted on *Tayama-goyomi* does not conform to the farming practices in the Tayama area. The way *rekichu* are placed on the calendars suggests they were strongly connected to belief, especially the folk faith of *Koshin*, rather than agriculture.

In the early modern period *Tayama-goyomi*, in particular, *Koshin* days were indicated prominently so users could understand information on those specific days regardless of their ability to read. This finding calls for a re-evaluation of the view that *Tayama-goyomi* were created for the illiterate.

The study also highlights some other issues for future research, for example, the role of *Esh-ingo*, or pictorial Heart Sutra, in the development of *Tayama-goyomi* in connection with the *Koshin* belief.

はじめに

田山暦は絵暦の一種で、江戸時代後期に盛岡藩領の田山村（図1：現岩手県八幡平市）で作られ、主にその周辺で使われた暦である。文字を用いることなく、日付や暦注も含め全て絵文字で表現されることから、文字を読めない人（文盲）のための暦とされ、それ故に「盲（めくら）暦」と呼ばれた⁽¹⁾。

現存最古の田山暦は天明3年（1783）のものである。様々な記録を見ると幕末まで作られていたことがわかるが、散逸したものが多く、今日まで残る実物資料は限定的である。

田山暦に関する記録は既に近世から見られ、菅江真澄や橋南谿をはじめ、山片蟠桃、シーボルト、松浦武四郎らがそれぞれの著作において図入りで田山暦を紹介している。中でも橋南谿の著作は大流行し、『東遊記後編』に掲載された田山暦を多くの人が目にするところとなった。そうした版本の影

暦もあり、田山暦は文字が読めない人が農作業の目安とするための暦であるとの印象が固定化したのであるが、その見方は近年の研究に至ってなお見直されることなく続いてきた。

また、従来の田山暦の研究は、絵で表現された暦注の読み解きや盛岡暦との比較に重点が置かれ、田山暦成立の背景や、本来何のために作られた暦であるのかについてはほとんど顧みられずにきた。

本稿は、そうした従来の見方を転換し、新たな視点の提示を試みるものである。

I 田山暦について

(1) 「南部めくらもの」と田山暦

「田山暦」の呼称は幕末期の記録に既に見られるものであるが、それ以前の記録からは単に「盲暦」、あるいは製作者である八幡善八の名を冠して「善八盲」、「善八暦」と称されることもあったことが知られる。盛岡藩（南部領）内には他に盛岡で製作された別種の「盲暦」があることから、今日では製作地を冠してそれぞれ「田山暦」、「盛岡暦」と区別し、両者含めて総称する場合は「南部絵暦」と呼称するのが通例である。

また、同様の手法で経文を絵で表した「盲心経」、「盲経」もある。これにも田山系、盛岡系があり、「南部絵経」とも称される。そうした絵文字で表された暦や経文を総括し、かつては「南部めくらもの」と総称されることもあったが、それぞれの出現の時期は異なる。本稿では詳細を省くが、最初に創案されたのが般若心経を絵文字で表した田山の「盲心経」であり、次いで田山の「盲暦」が案出された。盛岡の「盲暦」や「盲経」は田山のその影響のもとに成立したものと考えられる。真澄や南谿は田山暦とともに盲心経も紹介しているが、この段階ではまだ盛岡系のものはないことから真澄も南谿も触れていない。現存する暦で比較すると四半世紀以上下ってから盛岡暦が現れたものと推定される。したがって、当初は両者を区別する必要はなく、盲暦といえば田山暦を指していたことになる。

田山暦と盛岡暦は盲暦、南部絵暦として同列に括られるが、相違点も多い（図2、図3参照）。文字によらずに暦が表現される点では共通するが、形も作り方も異なる。田山暦は横長の折本形式で、手書きと木製の判⁽²⁾の押印により暦面が作られた。初期のものは手書き部分が多いが、次第に判が多用されるようになった。刷り物ではなく、木判の押印による手作りであり、木判は一度作ると年を越えても継続して使用することができた。それに対し盛岡暦は版木を用いた一枚刷の縦長の暦である。一度版木を作ると暦は量産可能となるが、暦は毎年変わるため版木の更新が必要となる。

田山暦の研究は盛岡暦と合わせて行われることが大半であるが、本稿では田山暦を中心

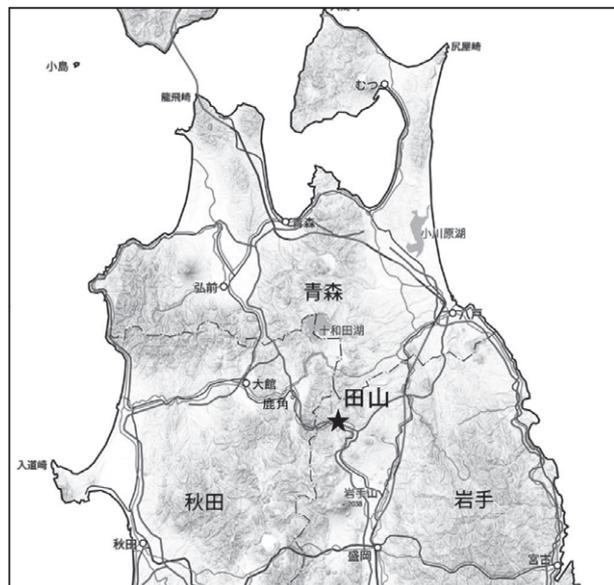


図1 岩手県八幡平市田山の位置（地理院地図を加工）

に述べ、盛岡暦については必要に応じて触れるにとどめる。

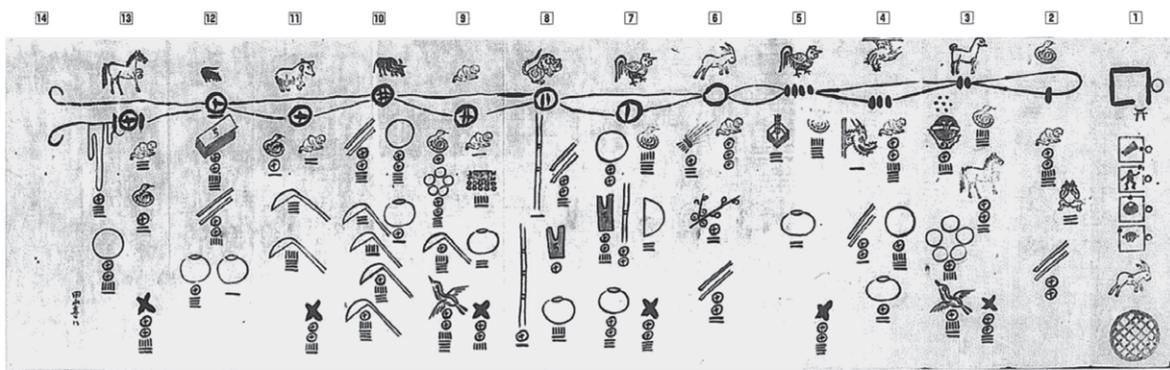
(2) モノとして見た田山暦

田山暦は刷り物ではないことから、全く同じというものはないが、全体を通してみると以下のような共通点がある。

半紙を横に継ぎ合わせて作られ、広げると短辺 24~26 cm、長辺 90~116 cm の横長の長方形となる。長辺の長さに幅があるのは、閏月のある年の暦は一月分長くなるからでもある。一折の幅が 7 cm 程度になるように折りたたまれた折本形式を採り、折り目を境とした各面にそれぞれの月が配される。

原則として右端の第 1 面に歳徳以下四神の方位と干支の何年であるかが示され、その左隣の第 2 面が正月となり、順次左に第 3 面が二月、第 4 面が三月と進む。初期の田山暦では最終月の次にもう一面あり、上部に縄の末端が描かれ、下部に製作者名が入る。各月の面の最上位には月朔干支が配され、その下には暦全体を横断するような二つ折りの縄を用いて月の大小が表される。月名表示が上下の縄に貫かれるのが大の月、下の縄だけに掛かるのが小の月である。これらによりその面の月名、朔日の干支、その月の大小、といった暦情報を読み取ることができるようになっている。

各面にはその月の様々な暦注などがそれぞれ何日であるのかを絵文字で示してある。暦注は頒暦に



十四折	十三折	十二折	十一折	十折	九折	八折	七折	六折	五折	四折	三折	二折	一折
(馬) 午	(鼠) 子	(羊) 未	(牛) 丑	(龍) 申	(虎) 寅	(龍) 酉	(兔) 卯	(龍) 辰	(蛇) 巳	(辰) 戌	(巳) 亥	(蛇) 巳	朔日
十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月	月	大小
小	大	小	大	小	大	小	大	大	小	大	小	大小	属注
庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八	庚申(三百) 巳(廿) 土(廿) 十(廿) 子(廿) 丑(廿) 寅(廿) 卯(廿) 辰(廿) 巳(廿) 午(廿) 未(廿) 申(廿) 酉(廿) 戌(廿) 亥(廿) 田山号八

図2 天明3年田山暦と暦注の読み解き (寒川神社 2004 より複写)

基づくもので、伊勢暦を参照したものと思われるが、その全てが表されるわけではなく、各月原則2~3列に収められ、原則として折を越えて隣の面に及ぶことはない。一つの月が一つの面で完結するように作られている。⁽³⁾

絵で表された暦注や日付が何を表しているかについてはこれまでの論考で詳しく紹介されていることから（岡田1980；岩手県立博物館編1983他）、本稿ではその詳細を省くが、絵文字が何を表すのかについて例を挙げると、猿は庚申、蛇は己巳、泣き鬼は節分、矢の刺さった重箱は八十八夜、稲束は田植えよし、種壺は種蒔きよし、鎌は刈り取りよし、×は十方暮のごとくである。参考として天明3年の読み解き例を図2の下部に示す。

(3) 田山暦に関する近世の記録

近世の記録には、田山暦について文章のみで記録したもの他に、図も示したものもある。近世のうちに版本化されて広く流通したものがある一方、稿本や写本のみが伝わり、現代になってから出版されたものもある。ここでは版本化の有無にかかわらず、近世のうちに書き留められた記録の概要を述べる。

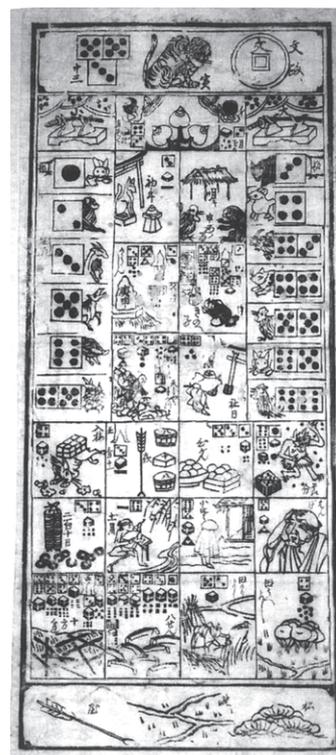


図3 文政13年盛岡暦
(岡田2004より複写)

①菅江真澄（1754~1829）の『けふのせはの』、『凡国異器』

真澄の日記『けふのせはの』の天明5年9月3日の条に「やをら田山といふ里に出たり。このあたりの村にては、ものかく人まれに、めくら暦とて、春より冬まで一とせの月日の数を形にかいて、田植え、耕の時をしれり」と記している（内田・宮本1971：306-307）。

この日記に図は添えられていないが、『凡国異器』に天明3年の田山暦全体（図8a参照）と盲心経の一部が載る（内田・宮本1973：93-97）。真筆本は失われ、写本が残るのみだが、暦の全体像は知ることができる。真澄が田山を通過したのは天明5年であるが、入手、あるいは書写した暦は天明3年のものだったことになる。

②百井塘雨（1748~1799）の『笈埃随筆』

京都の豪商万屋の次男で、安永の初めから天明の末頃まで全国を廻国した塘雨は『笈埃随筆』に「其府を離れし山隘の村民文字を知らぬ故に年々の暦日、農の為に村長より暦を絵にして作事を知らしむ。月朔の十二支は、子は鼠、亥は猪を図し、八専入梅二至三伏の其たとへたるは宛も謎の如し。其中一二をいはん、八十八夜は重箱に矢の立たるなり、種蒔は畚を画き、田刈吉は鎌なり。節分は鬼の泣図なり。絶倒限り無し。且仏事祈禱には必ず般若心経を読誦す。是又盲暦に類して一段おかしく、頗る解くに至るもの也」と記している。絵の挿入はないが、盲暦と盲心経を指す文であることは明らかである。『笈埃随筆』の記載は順不同で、日付も入らないことから、塘雨の立ち寄り時期も不明であるが、廻国と帰京の時期を考えると真澄と前後する時期の記録と推定される。

③橋南谿（1753～1805）の『東遊記後編』

南谿は京都の医師（伊勢久居出身）で、天明5～6年に北陸、東北を周遊した記録を『東遊記』、『東遊記後編』にまとめた。後者に、「南部の辺鄙には、いろはをだにしらずして、盲暦というものありとぞ。余が通行せし街道にはあらねども聞きしままを記す（後略）」と記し、天明3年田山曆（図8b参照）と盲心経の図を掲載している。ただ、南谿自身が記しているように自分では田山をとおらず、田山曆のことも伝聞をもとに書いたものである。詳細は稿を改めるが、南谿の田山曆に関する情報源は塘雨だったと思われる。⁽⁴⁾真澄や塘雨の記録は版本にならなかったことから知る人は限られたが、多くの人が田山曆を知る契機となったのは、寛政9年（1797）に刊行されて大流行したこの『東遊記後編』であった。

④シーボルト（1796～1866）の『NIPPON』

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは1832年から刊行が始まった大著『NIPPON』で天明3年田山曆（図8d参照）を海外に紹介した（『日本』中井他訳1978）。曆の内容も解説されているが、シーボルトが入手したのは田山曆の実物資料ではなく、南谿の著作であり、掲載した田山曆も『東遊記後編』から引いたものである。

⑤松浦武四郎（1818～1888）の『鹿角日誌』

武四郎は南谿の著作を読んだ上で鹿角地方を旅し、嘉永2年（1849）7月28日から3日間田山に滞在して嘉永2年の田山曆を入手し、その全体を『鹿角日誌』で紹介した（図8e参照）。武四郎は、南谿が記した盲暦を求めようと田山村で尋ねても「甚是を秘て」売ってもらえず、宿の主人に頼んでようやく1枚買い得たとする。そして、正月の市日には毎年毛馬内、花輪でこれを売っていること、この村の善八宅で年々作ること、初めて作ったのは宝暦、天明の頃であること、⁽⁵⁾今の善八はひ孫であること、ひ孫の善八は60歳ほどであること、当時は源左衛門と改名していたこと、この辺ではこの盲を善八盲と言っていることなどの聞き書きを記している。また、田山に着いた夜には早速善八宅を訪ねて歓待を受け、かつて京都の人が来て盲暦、盲経に感じ入り、女子供（ママ）までそれが通用することを喜んで詩を唐紙に書き残していったという善八から聞いた話も記している。『鹿角日誌』には、嘉永2年の田山曆の全体が掲載され、曆注の解説も付されている。

⑥山片蟠桃（1748～1821）の『夢の代』

蟠桃も『夢の代』で天明3年の田山曆を図入りで紹介している（図8c）。その成稿は文政3年（1820）であることから、蟠桃も南谿の『東遊記後編』掲載田山曆を知っていた可能性は高いが、他の情報も得ていた可能性も考えられる（本稿Ⅲ-(2)参照）。蟠桃もまた、文盲のための曆であることについて触れている。

⑦上山広崇（生没年不詳）の『万延申歳両鹿角扈従日記』

盛岡藩士上山は万延元年（1860）8月に藩主の鹿角巡行に同行した際に『万延申歳両鹿角扈従日記』を著し、田山曆について記録するとともに、安政7年（1860）田山曆の詳細な写し（図7c参照）

を残した。安政7年は3月に万延に改元されていることから、巡行の年に使用されていた田山暦を写したものであると思われる。

⑧その他

主要なものは以上であるが、他に文章のみで田山暦について触れているものとして、山崎美成（1796～1856）の『提醒紀談』や、漆戸茂樹（1790～1870）の『北奥路程記』がある。前者は常陸国安寺持方の「替帳」の引き合いに「南部領鹿角郡田山の替暦」を出したものである。後者は盛岡藩士の漆戸が幕末期の領内を巡った記録であるが、「田山暦などと云ふて判じ物の暦」との記載が見え、「田山暦」という呼び方が近世においてもなされていたことがわかる。

II 先行研究と問題の所在

(1) 先行研究

田山暦に関する記録は先に挙げたように近世においても見られるが、研究の俎上に載せられるのは1930年代からである。表1は田山暦及び田山暦に関連する研究の一覧であるが、それらを通覧すると、地元研究者を中心に研究が進められた1930～40年代、天文学者、歴史学者、民俗学者により研究が掘り下げられた1970～80年代、新たな資料の蓄積が進んだ2000年代に区分して考えることができる。以下、それぞれ第1期、第2期、第3期の研究として論を進める。

①第1期の研究（1930～40年代中心）

全国的に流通する書籍や研究誌に田山暦に関する記載が見られるようになるのは昭和12年とみられる。言語学者の金田一京助は3月20日付で発行された『日本文化史大系』の「原日本語の構成」の章に嘉永2年の田山暦を写真入りで紹介した（金田一1937）。本文とは脈絡がないまま、写真の下に「奥州の象形文字（盲暦）」の題とともに、絵文字が何を表しているかの解説を付しているのみであるが、田山暦が写真で紹介された初例とみられる。

次いで、4月1日付で発行された『日本民俗』第2巻第8号に、阿部秀三の「南部のめくら暦」が掲載された（阿部1937）。「会津暦」とともに「こよみのはなし」という小特集に組まれたもので、盛岡暦も含んだ2頁足らずの短文ではあるが、田山暦については橘南谿の『東遊記後編』の記載と同書に掲載された天明3年田山暦の冒頭部分の図を引きながら紹介している。この論考が田山暦が研究誌に取り上げられた嚆矢とみられる。前号の第7号では表紙に盛岡暦が掲載され、それについての阿部による解説が巻末に挿入されている。民俗学においてもこの頃に盲暦に関する注目があったことがわかる。

その背景には、盛岡を中心としたいわゆる「めくらもの」の研究の進展があった。教育者であり郷土史家でもある新渡戸仙岳は、それらと前後するようにあいついで盛岡暦に関する小論を発表し（新渡戸1937；1938）、それ以前から「めくら心経」の復刻にも取り組んでいた。

金田一は言語学的興味から田山暦を含む「めくらもの」を前掲書で紹介したのであろうが、盛岡出身の新渡戸の直接の教え子でもあった。一方の阿部は当時も発行が続けられていた盛岡暦の版元でも

表1 田山曆に関する研究史

刊行年	田山曆及び関連研究	備考（図・写真の初出を中心に）
1927 昭和2	南部叢書刊行會編「真澄遊覧記 けふのせはのゝ」『南部叢書 第6冊』南部叢書刊行會	
1931 昭和6	秋田叢書刊行會編「けふのせはのゝ」『秋田叢書別集 菅江真澄集 第二』秋田叢書刊行會	
1933 昭和8	住田正一編「鹿角日誌」『日本海防史料叢書 第十卷』海防史料刊行會	田山曆の図は割愛
1937 昭和12	新渡戸仙岳（筆名非佛）「盛岡めくら曆の沿革」『岩手毎日新聞』元旦号	
	金田一京助「原日本語の構成」『日本文化史大系』誠文堂新光社	嘉永2年曆写真掲載
	阿部秀三「南部のめくら曆」『日本民俗』2(8)	南谿の天明3年曆（第4群b）部分図掲載
1938 昭和13	新渡戸仙岳「南部めくら曆の沿革」『新岩手人』新年号	
1942 昭和17	佐藤勝郎『南部めくらもの文献大成』	
1946 昭和21	佐藤勝郎『南部めくらもの之研究』盛岡不流舎	
1969 昭和44	吉田武三編『東奥沿海日誌 〈付〉鹿角日誌』時事通信社	武四郎の嘉永2年曆（第4群e）図掲載
1970 昭和45	佐藤勝郎「南部めくらもの」『岩手の誇り—その風物とめくらもの』中儀本店	
1971 昭和46	内田武志・宮本常一「けふのせはのゝ」『菅江真澄全集 第一巻』未来社	
1972 昭和47	岡田芳朗『日本の曆』木耳社	現存天明3年曆（第1群a）写真掲載
1973 昭和48	内田武志・宮本常一「凡国異器」『菅江真澄全集 第九巻』未来社	真澄の天明3年曆写本（第4群a）写真掲載
	佐藤勝郎「現代に生きる盲曆」『万有こよみ百科歴史読本臨時増刊』新人物往来社	
1975 昭和50	吉田武三編「鹿角日誌」『松浦武四郎紀行集 上』富山房	
1976 昭和51	渡邊敏夫『日本の曆』雄山閣	把握した曆（第1・2・5群）の写真掲載
1978 昭和53	佐藤勝郎「風雪百七十年よみがえる南部めくら曆」『日本の曆大図鑑』新人物往来社	
	中井晶夫・金本正之訳『シーボルト『日本』図録第二巻』雄松堂書店	
1980 昭和55	岡田芳朗『南部絵曆ものと人間の文化史42』法政大学出版局	把握した曆（第1~6群）の写真掲載
1983 昭和58	岩手県立博物館編『南部絵曆』岩手県立博物館	把握した曆（第1・3・5・6群）の写真掲載
1984 昭和59	国立国会図書館編『国立国会図書館所蔵個人文庫展 その3 日本の曆』国立国会図書館	享和2年曆（第1群d）展示
1985 昭和60	工藤絃一「田山曆はいつ作られたか」『歴史研究』（285）歴史研究会	
1999 平成11	佐藤勝郎「絵表示の魅力 田山曆と南部盲曆」『曆の百科事典2000年版』本の友社	
2004 平成16	工藤絃一『田山曆・盛岡曆を読む』熊谷印刷出版部	工藤のそれまでの研究のまとめ
	寒川神社編『日本人の叡智—絵曆展』寒川神社	新出天明7年曆（第1群c）、既知の曆の写真掲載
	岡田芳朗『南部絵曆を読むあじあブックス57』大修館書店	岡田のそれまでの研究のまとめ
2005 平成17	岡田芳朗「『天明七年田山曆』について」『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』（13）	
2006 平成18	工藤絃一「新発見の田山曆—「天明七年田山曆」と「明治九年田山曆」—」『岩手県立博物館研究報告』（23）	新出明治9年曆（第6群）写真を掲載
	一関市博物館『塵も積もれば 盤溪先生の貼り交ぜ帳』一関市博物館	天保6年曆（第1群g）写真掲載
2009 平成21	安代町史編さん委員会編『安代町史 民俗編』八幡平市（旧安代町）	
2011 平成23	岡田芳朗「新資料『安永十年田山曆写本』について」『八幡平市博物館研究紀要』（2）	安永10年曆写し（第3群b）の写真を掲載
2012 平成24	渡辺章悟『絵解き般若心経—般若心経の文化的研究—』ノンブル社	
2013 平成25	岡田芳朗「新出天明三年田山曆について」『八幡平市博物館研究紀要』（3）	新出天明3年曆（第1群b）の写真を掲載
	工藤絃一「もう一つの「天明三年田山曆」」『民具マンスリー』46(3) 神奈川大学日本常民文化研究所	
2014 平成26	瀬川修「天明3年田山曆の蛇足庵本版と岩手県博本版の違いについて」『岩手県立博物館研究報告』（31）	
	工藤絃一「南部絵曆」『曆の大事典』朝倉書店	
	秋田県立博物館編『菅江真澄、旅のまなざし』秋田県立博物館	寛政3年曆（第6群）の写真を掲載
2016 平成28	小野寺俊彦『『田山曆』の周辺、つれづれ』『岩手県立博物館だより』（151）	
2020 令和2	秋田県立博物館菅江真澄資料センター「寛政三年の田山曆」『かなせのさと』（184）秋田県立博物館	

あるが、新渡戸の薫陶を受けた一人でもあった。他に佐藤勝郎も「めくらもの」の著作の発表を始めるが（佐藤 1942；1946）、佐藤もまた新渡戸の影響のもとで研究を始めた人物であった。このように新渡戸はいわゆる「めくらもの」総体の研究の指導的立場にあったとみられ、第1期の研究は新渡戸の影響のもとになされたと見ることができよう。

②第2期の研究（1970～80年代中心）

1970年代になると、田山暦に関する研究が大きく進展する。先述の佐藤も論考を相次いで発表した（佐藤 1970；1972；1973；1978）、それと前後して暦研究の最先端をゆく歴史学の岡田芳朗と天文学の渡邊敏夫が奇しくも同じ書名の『日本の暦』の中でそれぞれ田山暦を取り上げた。岡田は「盲暦」の章に「田山暦」の節を（岡田 1972）、渡邊は「絵暦」の章に「南部盲暦」の節を設けて（渡邊 1976）具体的に田山暦を論じている。

第1期は「めくらもの」の一つとして田山暦の研究が進められていたのに対し、第2期は暦研究総体の中に田山暦が位置づけられるようになったと見ることができる。

また、新たに天明3年田山暦の実物資料が研究対象となったことも第1期との大きな違いとして挙げられる。それまでは橘南谿の版本に掲載された田山暦でしかその内容を知ることができなかったものが、実物資料の出現により、それを用いて研究の深化が図られたのである。また、菅江真澄や松浦武四郎の著作の出版もあいつぎ、真澄の『凡国異器』の写本にある天明3年田山暦や武四郎の『鹿角日誌』の稿本にある嘉永2年田山暦も多くの人が目にすることができるようになった（内田・宮本 1973；吉田 1969；吉田 1975）。さらに、神宮徴古館所蔵資料中にあった田山暦やその類似史料の存在が明らかになったことも注目される。戦前から暦研究を進めていた渡邊が撮影した写真が渡邊の『日本の暦』に掲載されたのであるが（渡邊 1976）、徴古館の戦災により焼失したものも含まれており、今となっては掲載写真自体が貴重な資料となっている。

こうしたことも契機となって一層研究は進み、1980年に岡田は『南部絵暦』を著し、1983年に岩手県立博物館では民俗学の工藤絃一が中心となって図録『南部絵暦』が刊行された。田山暦と盛岡暦についてまとめたこの二書により、それまでの情報が集約されることとなり、この二人がその後の田山暦研究を牽引していくことになった。

③第3期の研究（2000年代中心）

2000年代に入ると、埋もれていた田山暦が新たに発見されるようになり、それらを用いた研究も岡田と工藤によって競うように進められた。

特筆されるのは2004年で、1月には工藤が『田山暦・盛岡暦を読む』（工藤 2004）を、12月には岡田が『南部絵暦を読む』（岡田 2004）を出版した。それぞれの絵暦研究の集大成ともいべき著書である。この間の9月には神奈川県寒川町の寒川神社で第二回寒川神社こよみ展が開催され、図録『日本人の叡智—絵暦展』（寒川神社 2004）も刊行された。この展示では前年に存在が明らかとなった天明7年田山暦も公開され、図録にそれまでに確認されている主要な田山暦と盛岡暦、加えて田山暦の影響を受けて江戸時代に作られたと考えられる深山暦も掲載された。新出の天明7年田山暦については早速両氏のそれぞれの著書でも触れられたが、詳細な検討を加えた論文も発表された（岡田

2005；工藤 2006)。

2012年には天明3年田山暦の新たな実物資料の存在が明らかになった。現存最古の田山暦(岩手県立博物館所蔵)と同年の田山暦の新出である。これについては2013年3月に岡田が(岡田2013)、同6月には工藤が考察を加え(工藤2013)、岩手県立博物館の瀬川修も同年の二つの田山暦を比較した研究を行っている(瀬川2014)。また、新たな天明3年田山暦は、判じ絵関係の特別展でも紹介された(練馬区立石神井公園ふるさと文化館2016他)。

この他、田山暦に関する言及は、『暦の大事典』(岡田編2014)や、『岩手県立博物館だより』(小野寺2016)に見られるが、近年の研究は少ない。そうした中、2020年に秋田県立博物館の『菅江真澄資料センターだより かなせのさと』に「寛政3年の田山暦」(秋田県立博物館菅江真澄資料センター2020)が掲載された。同館が所蔵し、既に特別展の図録にも写真が掲載されていた資料ではあるが(秋田県立博物館編2014)、岡田や工藤の研究では全く触れられていない資料である。同様に両氏の研究で取り上げられなかった資料としては、一関市博物館のテーマ展図録に掲載された天保6年田山暦がある(一関市博物館2006)。

(2) 問題の所在

これまでの先行研究を振り返ると、一貫して重視されてきたのは暦注に用いられた絵文字の解説、解説と盛岡暦との比較であった。それぞれの絵文字が何を表しているのかについての解説と解説に重きが置かれ、そのユニークさが強調されるあまり、機知、頓智が過大に評価されることもあった。一方、田山暦は文盲のための暦であるということについても共通した見方となっており、そうした文盲の人に農耕の目安を知らせるために作られた暦であるということに対しては異論が出されることはなかった。

こうした傾向は実は江戸時代から続くものであり、近世以来の書籍の影響で広まったものともみられるが、文盲との関係や、農耕との関わりについては既往の研究で具体的に論じられたこともなかった。

江戸の判じ絵に対しては誰も文盲のためのものとは言わないにもかかわらず、なぜ田山暦は文盲のための暦とされるようになったのか。また、雪国にあって、とても適期とは思えない時期に「種蒔き良し」の絵文字があるにもかかわらず、なぜこの暦が農耕の目安とされたといえるのか。そもそもこの暦は何を目的として作られたのか。こうした議論がないままに田山暦の性格付けがなされてきたともいえる。

また、第1期の研究は、岩手県内の資料を中心に進められたのであるが、それぞれの研究を詳細に検討すると、実は当時の岩手県内には田山暦の実物資料はなかったのではないかと思われ、その点にも注意を要する。

佐藤勝郎によれば、明治末頃に地元に残存したためくらはものは盛岡暦のみで、盲経や田山暦、旧版の盛岡暦の発見に重点が置かれており、新渡戸も「めくらのもの」の現物は手にしておらず、南谿の『東遊記』の版本の入手に腐心し、数年前(昭和初期か：筆者註)にそれを手に入れたとある(佐藤1942)。その佐藤が引く新渡戸の言(佐藤1946)からは、発言当時に残る安政7年の田山暦とされるものは、大正初期の八幡家に残る実物の木判を用いた模造品であることがわかり、さらに、岡田の指

摘によれば（岡田 1980）、嘉永 2 年田山暦も昭和初期の同様の模造品で、嘉永 2 年に実用されたものではないとされる⁽⁷⁾。

図録『南部絵暦』には、その時点において「実物は江戸時代のものが 5 点残っているのみで、それも古い方の 3 点は県外の人が所有している」とあることから（岩手県立博物館編 1983）、県内に残るのは 2 点ということになるのであるが、その 2 点は嘉永 2 年と安政 7 年のものである。少なくとも昭和初期までそれらの実物資料は地元になかったのであり、その後の発見の報もないままに出現したことになる。暦面の絵文字は江戸時代に実際に使用された木判によるものであるにしろ、それが後代の模造であるならば、経緯を踏まえた扱いをすべきものと思われる。研究の最初期に金田一が用いた写真の嘉永 2 年暦にも同様のことがいえよう。

従来の研究には、そうした経緯をあまり重視しない傾向もみられたが、その後、実物資料は増え、同年のものが複数確認されるケースも出てきた。また、近世においても田山暦の類似暦や来歴が明白な写しがあること、近世の版本の中には稿本が残るものがあることも判明している。

このように、現状においては相応の数の田山暦関連資料が揃ってきたと見ることもできるが、それらが混然となって同列に研究が進められることには危惧を覚える。田山暦が使用され始めた時期や背景、用途、性格を明らかにするには、それぞれの資料の来歴も含めた整理が必要となろう。

そこで本稿では、まず現在把握されている田山暦及び田山暦関連資料を集成の上、来歴ごとの分類により近世の実物資料を明確にする。抽出された近世の実物資料については時期別の分類を試み、その変遷を探る手掛かりを得たい。その上で、様々な資料を比較することを通じて、生業と信仰の観点からも田山暦の性格を論じてみたいと考える。

Ⅲ 田山暦関連資料の集成と分類

先行研究を通覧してみると多様な田山暦関連資料があることがわかった。本章ではこれまでの研究で取り上げられてきた田山暦及び関連資料を網羅的に集成し、それらの来歴別分類と時期別分類を試みる。

(1) 田山暦及び関連資料の集成

先行研究から田山暦に関連する資料を抽出すると、田山暦の実物資料の他、実物を忠実に写した模写、縮尺を変えて稿本や版本に掲載された田山暦、田山暦を模倣して製作された暦、稿本をもとに現代に製作された暦、田山暦とは異なるが明らかな影響が見られる類似暦などの資料があることがわかる。それらを把握できる限り集成し、暦に示された年号順に並べて表 2 に示した。

(2) 集成資料の来歴別分類

次に、集成した資料を検討し、それぞれの来歴に基づいて便宜的に六つの群に分類した。それぞれの群の概要は以下に記し、分類結果は表 2 に示した。また、群ごとの田山暦及び関連資料は図 4～12 にまとめた。

表2 田山曆及び田山曆関連資料年代順一覧

	年号	西暦	所蔵・掲載	法量 (cm)	来歴別分類	図	時期	備考
1	安永4年	1775	国立国会図書館所蔵	29.5×124.5	第3群第1類	7a	前期	天明3年に書写。享和2年曆とともに「盲曆張交帖」に貼り込み
2	安永10年	1781	所蔵先不明	28×184	第3群第1類	7b	前期	寛政期に書写か。2007年古書店目録に掲載あり
3	天明3年	1783	岩手県立博物館所蔵	26.4×90.6	第1群	4a	前期	大槻民治写本のみ現存。真澄の田山通過は天明5年 稿本、版本とも現存。版本刊行は寛政9年。南谿は田山を通過せず 稿本、版本とも現存。成稿は文政3年か 『東遊記後編』をもとに紹介
4			蛇足庵所蔵	26.4×89.6	第1群	4b	前期	
5			菅江真澄『凡国異器』掲載	—	第4群	8a	前期	
6			橋南谿『東遊記後編』掲載	—	第4群	8b	前期	
7			山片蟠桃『夢の代』掲載	—	第4群	8c	前期	
8			シーボルト『日本』掲載	—	第4群	8d	前期	
9	天明6年	1786	神宮徴古館所蔵		第5群第1類	9a	—	満籬館主人作
10	天明7年	1787	寒川神社所蔵	23.7×98.7	第1群	4c	前期	
11	寛政3年	1791	秋田県立博物館所蔵		第6群	11a	後期	内容は寛政3年だが使用本判は後期。文化14年頃に製作か
12	寛政7年	1795	寒川神社所蔵		第5群第2類	10a	—	橘雫(市場通笑)の「深山曆」
13	寛政10年	1798	寒川神社所蔵		第5群第2類	10b	—	橘雫(市場通笑)の「深山曆」
14	寛政11年	1799	寒川神社所蔵		第5群第2類	10c	—	橘雫(市場通笑)の「深山曆」
15	寛政12年	1800	神宮徴古館旧蔵		第2群	6a	前期	戦災焼失。渡邊敏夫『日本の曆』に部分写真あり
16	享和2年	1802	国立国会図書館所蔵	24.5×101	第1群	4d	前期	安永4年曆とともに「盲曆張交帖」に貼り込み
17	文化8年	1811	静岡県御殿場市個人所蔵		第5群第2類	10d	—	橘雫(市場通笑)の「深山曆」
18	文化13年	1816	御殿場市個人所蔵	24.4×107.8	第1群	4e	前期	
19	文政6年	1823	神宮徴古館旧蔵		第5群第1類	9b	—	戦災焼失。渡邊敏夫『日本の曆』に部分写真あり
20	天保4年	1833	『時・曆・プラネタリウム』掲載		第5群第2類	—	—	「深山曆」か。原本所在不明
21	天保5年	1834	東北大学附属図書館所蔵		第5群第2類	10e	—	橘雫(二代目か)の「深山曆」
22	天保6年	1835	東北大学附属図書館所蔵		第1群	5f	後期	部分
23			一関市博物館所蔵		第1群	5g	後期	大槻盤溪「塵積成山」に貼り込み
24	天保10年	1839	神宮徴古館旧蔵		第2群	6b	後期	戦災焼失。渡邊敏夫『日本の曆』に写真あり
25	天保11年	1840	東北大学附属図書館所蔵		第1群	5h	後期	部分
26	天保15年	1844	三島曆師河合家所蔵	25.5×116.5	第1群	5i	後期	
27	嘉永2年	1849	松浦武四郎『鹿角日記』掲載	—	第4群	8e	後期	稿本現存。武四郎は嘉永2年に田山を通過し八幡家から曆を入手
28			八幡家所蔵	30.9×144.8	第6群	—	後期	八幡家は田山曆版元。岩手県立博物館『南部絵曆』に写真あり
29			岩手県立博物館所蔵		第6群	—	後期	秋田県個人から寄贈。他との異同不明
30			神奈川県立歴史博物館寄託		第6群	—	後期	長谷部コレクション。『江戸の判じ絵 これを判じてごろうじろ』に写真あり
31			静岡県企業所蔵		第6群	—	後期	『日本人の叡智—絵曆展』に写真あり
32			『日本文化史大系』掲載		第6群	—	後期	金田一京助が写真を掲載
33			岡田『南部絵曆』掲載		第6群	—	後期	岡田芳朗の著作で他にも使用
34			『日本の曆大図鑑』掲載		第6群	—	後期	佐藤勝郎の他の著作でも使用
35			『岩手の誇り』掲載		第6群	—	後期	曆首での比較はできず、佐藤の著作で他にも使用
36			安政5年	1858	八幡家所蔵	30.2×36.5	第6群	—
37	安政7年	1860	盛岡市公民館所蔵		第3群第1類	7c	後期	上山広崇書写。『万延申歳両鹿角扈従日記』に記事あり
38			佐藤家所蔵	24.8×102.1	第6群	—	後期	岩手県立博物館寄託。佐藤(勝郎)家は盛岡曆版元
39			静岡県御殿場市個人所蔵		第6群	—	後期	
40	万延2年	1861	岩手県立博物館所蔵	27.0×118.1	第3群第2類	7d	後期	小笠原白雲の模写。小笠原家から寄贈
41			岡田『南部絵曆』掲載		復刻田山曆	—	後期	長谷部コレクション。模刻木活で製作
42	明治9年	1876	岩手県個人所蔵		第6群	—	—	2004年に発見
43			岩手県個人所蔵		第6群	—	—	翌年上記と同じ家から発見

第1群：現存田山暦（図4・5）

実際に近世の田山で作られたと推定される田山暦のうち、現存する実物資料を「現存田山暦」とし、第1群に分類する。田山暦研究の基礎資料となるものである。

これまでに確認された田山暦の中で最も古いものは天明3年（1783）のもので、2点確認されている。1点は図4aに示した岩手県立博物館所蔵のもの、他の1点は図4bの蛇足庵所蔵のものである。田山暦の初期形態を示すものとして貴重な資料であるとともに、発行数が少ない田山暦にあって、同年のものが複数確認されている点においても重要である。

この他、寒川神社所蔵の天明7年（1787）暦（c）、国立国会図書館所蔵の享和2年（1802）暦（d）、御殿場市個人蔵の文化13年（1816）暦（e）、東北大学附属図書館所蔵の天保6年（1835）暦（f）、同館所蔵天保11年（1840）暦（h）、三島市個人蔵の天保15年（1844）暦（i）を現存田山暦として挙げるができる。gの一関市博物館所蔵の天保6年暦は先行研究で取り上げられたことはないが、本稿V-(1)で述べるように現存田山暦と考えられることから本群に含めたものである。

嘉永2年暦、安政7年暦を「実在した田山暦」（工藤2004）、「現存する田山暦」（工藤2006）に含めて論じられることもあるが、既に述べたようにこの両年の暦には、過去に遡って大正、昭和期に製作されたものがあり、現状においてそれと異なるものであることを示すことは困難であることから、本稿においてはそれらを現存田山暦に含めず、後述の第6群に含めることとする。

第2群：焼失田山暦（図6）

実際に近世の田山で作られたと推定される田山暦のうち、現代において実在が確認されながらも実物は焼失し、写真のみが残る資料を「焼失田山暦」とし、第2群に分類する。実物は失われ、詳細な検討は困難であるものの、写真により内容が確認できるものであり、現存田山暦に準ずる資料となるものである。

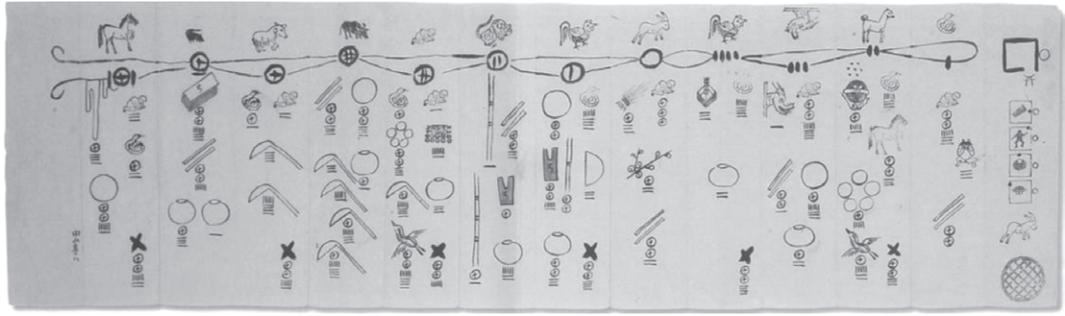
焼失田山暦は寛政12年（1800）暦、天保10年（1839）暦の2点であり（図6a、b）、いずれも神宮徴古館旧蔵のものである。戦災で焼失したものであるが、渡邊敏夫が撮影した写真が残る（渡邊1976；岡田1980）。同時に焼失した資料の中には田山暦風の文政6年の暦もあるが、それについては田山暦そのものではないことから本群には含めず、第5群に分類した。

第3群：模写田山暦（図7）

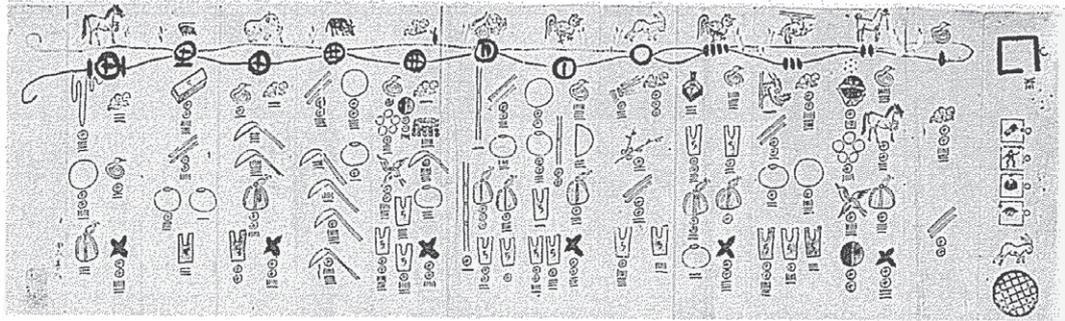
実際に近世の田山で作られたと推定される田山暦を詳細に模写した資料を「模写田山暦」とし、第3群に分類する。本来木判の押印によったはずの部分は手描きで表されているが、実物の内容を伝える資料として重要である。いずれももとなつた実物資料は残されていない。便宜的に模写時期により細分し、近世の内に模写されたものを第1類、現代になってから模写されたものを第2類とする。

第1類

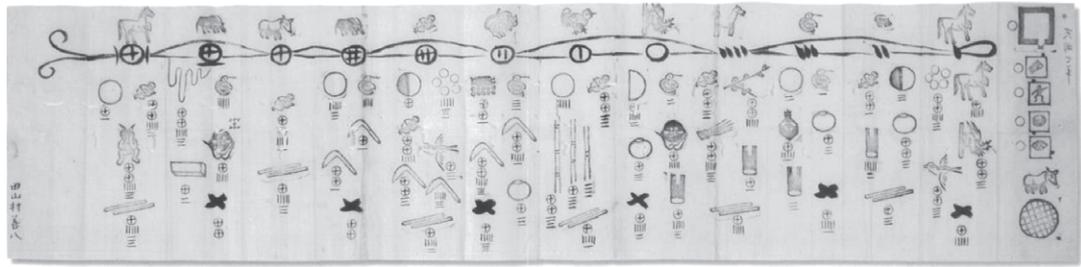
本類に分類するのは、国立国会図書館所蔵の安永4年暦写し（図7a）、所蔵先不明で写真のみが残る安永10年暦写し（図7b）、盛岡市公民館所蔵の安政7年（1860）暦写し（図7c）である。aは天明3年に模写、cは暦と同年（ただし模写時は改元されており万延元年）の模写、bは詳細不明だが



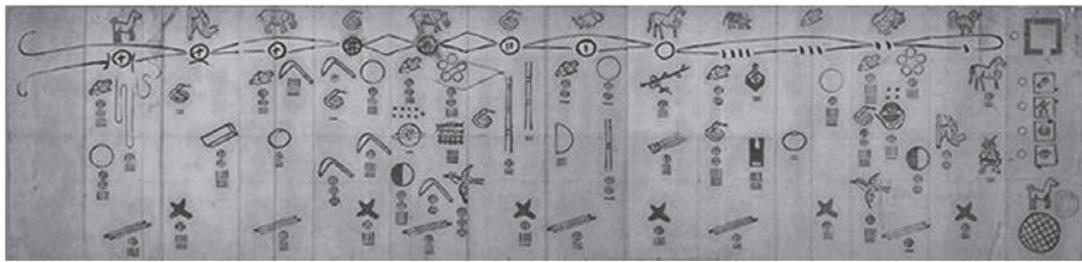
a 天明3年曆 (岡田 2004 より複写 原資料岩手県立博物館所蔵)



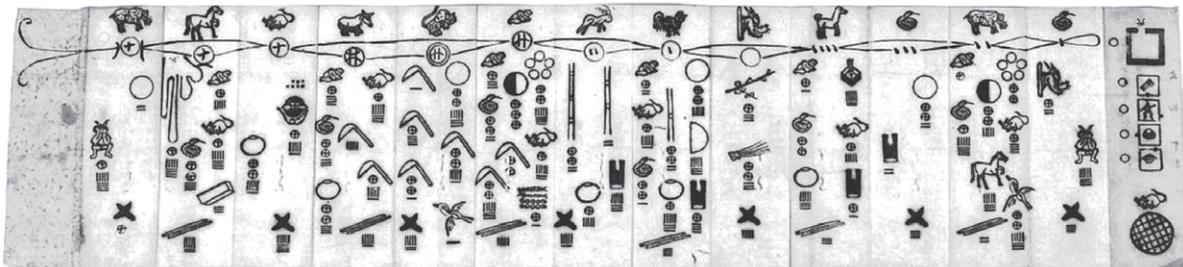
b 天明3年曆 (工藤 2013 より複写 原資料蛇足庵所蔵)



c 天明7年曆 (岡田 2004 より複写 原資料寒川神社所蔵)



d 享和2年曆 (国立国会図書館 Web より複写 原資料国立国会図書館所蔵)

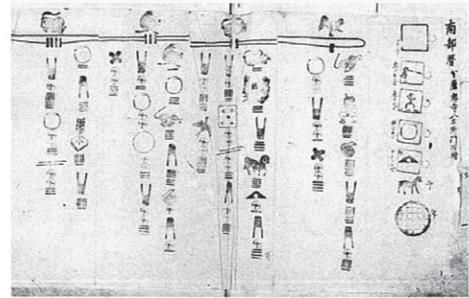


e 文化13年曆 (寒川神社 2004 より複写 原資料静岡県個人所蔵)

図4 第1群：現存田山曆 (1)



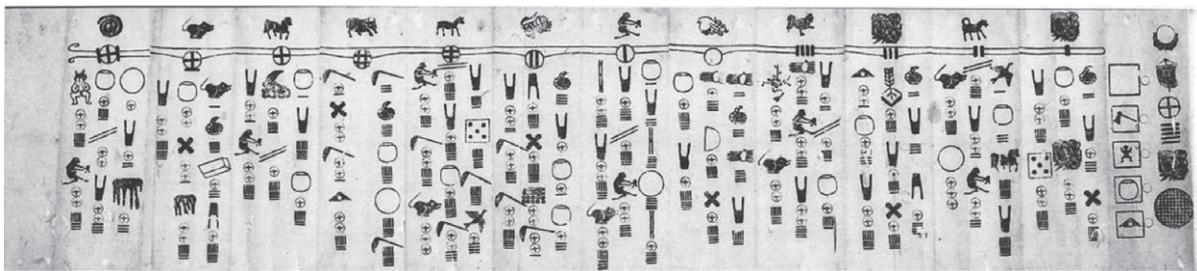
f 天保6年暦（岡田2013より複写 原資料東北大学附属図書館所蔵）



g 天保6年暦（一関市博物館2006より複写 原資料一関市博物館所蔵）

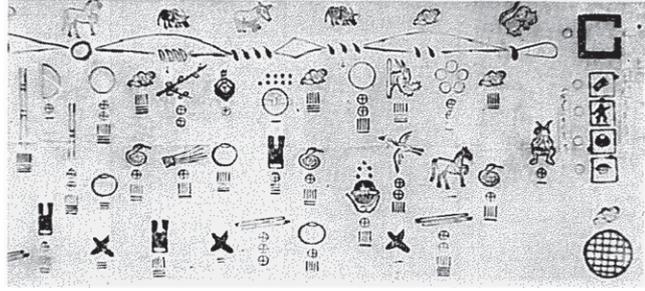


h 天保11年暦（寒川神社2004より複写 原資料東北大学附属図書館所蔵）

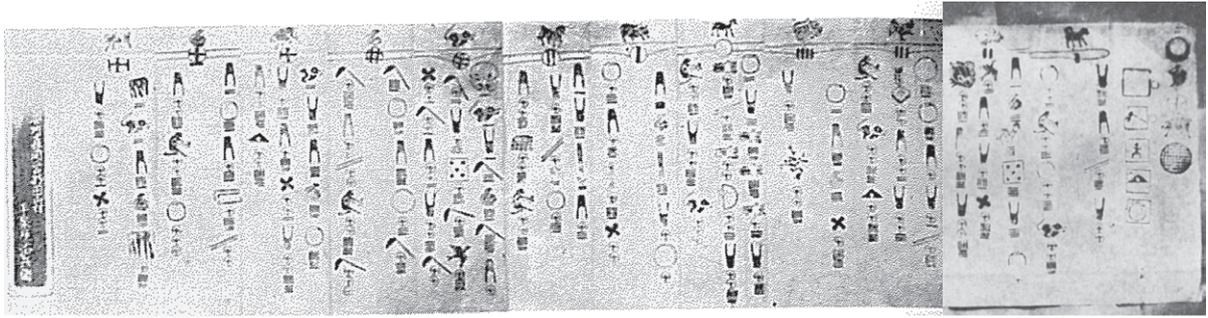


i 天保15年暦（寒川神社2004より複写 原資料三島暦師河合家所蔵）

図5 第1群：現存田山暦(2)



a 寛政12年曆（渡邊1976より複写 原資料神宮徴古館旧蔵）



b 天保10年曆（[左] 渡邊1976、[右] 岡田2004より複写 原資料神宮徴古館旧蔵）

図6 第2群：焼失田山曆

寛政期の模写とされる。

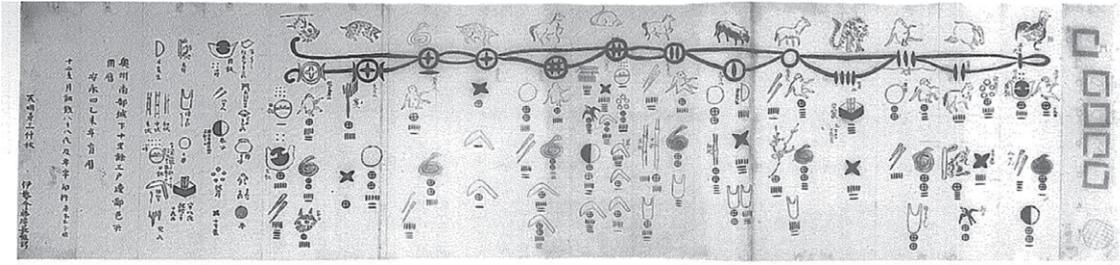
aは、第1群の享和2年曆等とともに「盲曆張交帖」に整理されていたもので、「奥州南部城下十里餘三戸辺鄙邑取用曆 安永四乙未年盲曆 十二支月蝕錢八十八夜及年字印行 原本不分明 天明第三仲秋 伊勢介藤原長桓写」の書き込みや、絵文字が何を表わしているかについての注釈が付されている。その記載から実物では十二支などに印が用いられていることなどがわかる。安永4年の曆を天明3年に写したもので、長櫃の詳細も不詳であるが、その名は天明2年に書写された数種の職人歌合にも確認でき、書写年の妥当性は高いものと思われる。bは岡田芳朗が紹介したもので（岡田2011）、古書目録掲載写真が残るのみで詳細は不明であるが、初期の田山曆の特徴がうかがわれる資料である。

a、bともに現存最古の実物資料より古い年代のものを後年に模写していることから、模写年の実在の田山曆を参考に過去に遡った年のものを作成した可能性も排除はできないが、後述するような田山曆の変遷の中で考えると、曆面に記された年の実在の田山曆を模写したものである可能性が極めて高いものとする。田山曆の初源が、現存の天明3年より古く、少なくとも安永期に遡るものであることを示唆する重要な資料であるとする。

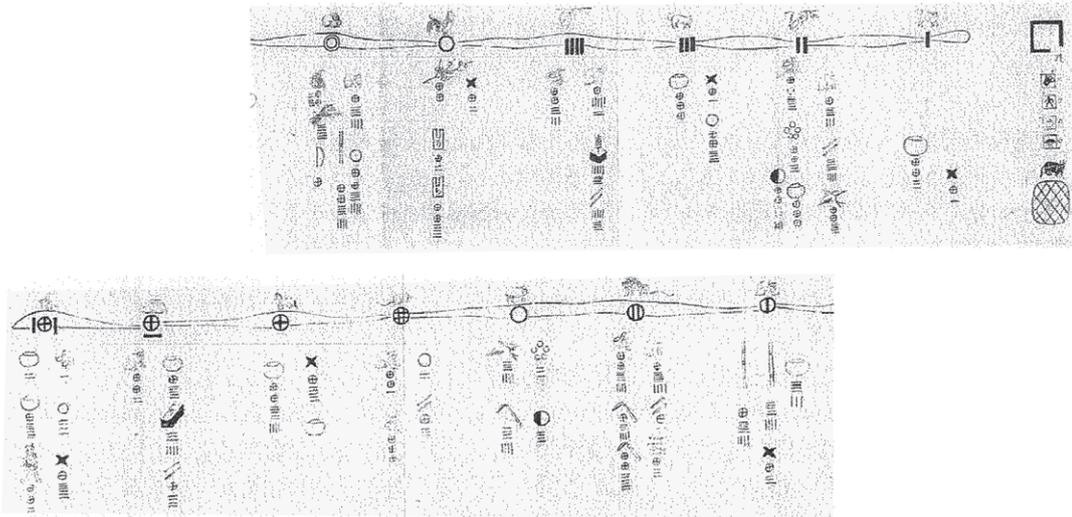
cは本稿I-(3)に記した『万延申歳両鹿角扈従日記』にあるものである。藩主の鹿角巡行に同行した盛岡藩士上山広崇による詳細な模写で、田山曆の版元の八幡家にも、藩主が田山に泊った際に請われて盲曆を差し上げた旨の記録が残るとされており（岡田1980）、八幡家から直接入手した曆の写しと思われる。なお、この写しをもとにした模造品もあるが、それについては第6群に分類する。

第2類

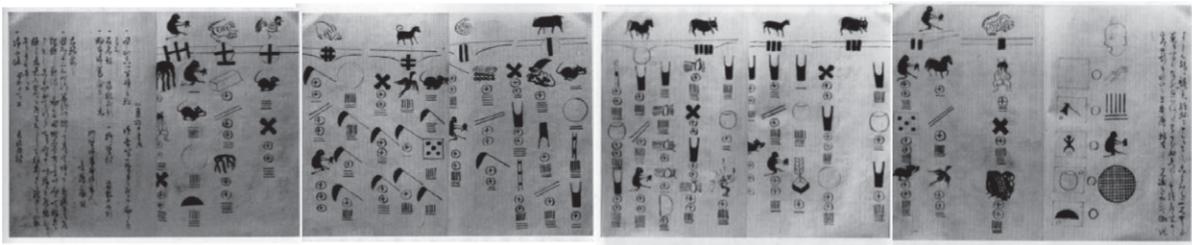
本類に分類するのは岩手県立博物館所蔵の万延2年（1861）曆写し（図7d）で、昭和初期に新渡



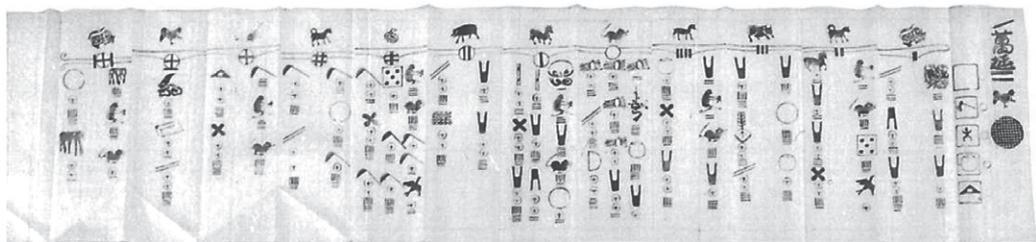
a 安永4年曆（寒川神社2004より複写 原資料国立国会図書館所蔵）



b 安永10年曆（岡田2011より複写 原資料所蔵先不明）

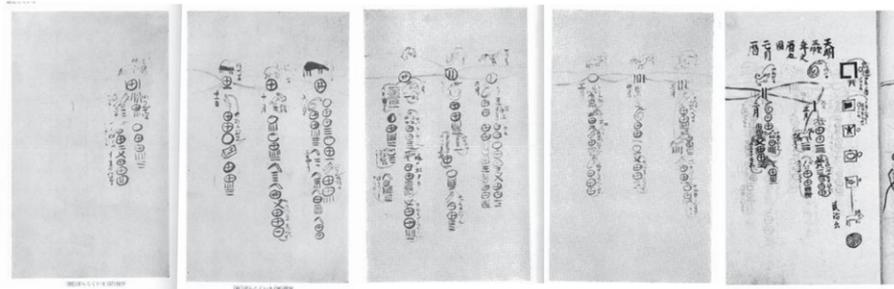


c 安政7年曆（岡田2004より複写 原資料盛岡市公民館所蔵）

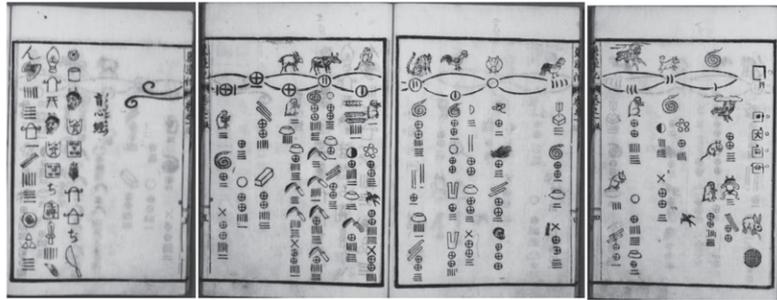


d 万延2年曆（寒川神社2004より複写 原資料岩手県立博物館所蔵）

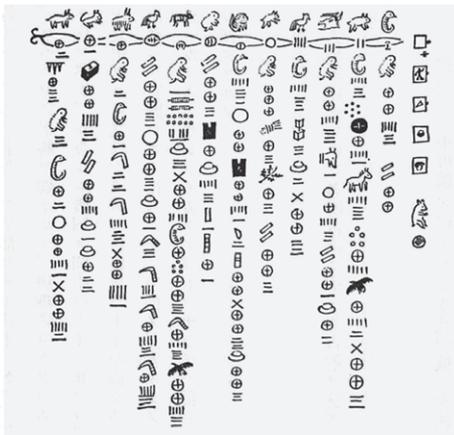
図7 第3群：模写田山曆



a 天明3年曆：菅江真澄「凡国異器」写本
 ([左4頁] 内田・宮本 1973、[右1頁] 豊橋市美術館 1999 より複写)



b 天明3年曆：橘南谿『東遊記後編』版本
 (早稲田大学図書館古典籍総合データベースより複写 原資料早稲田大学図書館所蔵)



d 天明3年曆：シーボルト『日本』刊本
 (中井他訳 1978 より複写)



c 天明3年曆：山片蟠桃『夢の代』版本
 (岡田 1980 より複写)



e 嘉永2年曆：松浦武四郎『鹿角日誌』稿本
 (佐藤編 2019 より複写 原資料松浦武四郎記念館所蔵)

図8 第4群：掲載田山曆(1)

戸仙岳が実物を見、画家の小笠原白雲が写したとされるものである。実物資料は木判の押印を基本としながらも「万延」の部分については手書きだったとされる。事実とすれば文字を使わないのが大原則の田山暦にあって、唯一手書き文字を含む例となる。この模写に基づいて模造した暦もあるが、これについては第6群に分類する。

なお、第1群aの天明3年現存田山暦には暦注の読み解きが朱書きされたほぼ原寸大の写しが付いているが(岡田2004:116)、実物資料と対になったものであることから独立した模写として分類はせず、現存田山暦の附として理解しておく。

第4群：掲載田山暦(図8)

近世の稿本、写本、版本に掲載された田山暦を「掲載田山暦」とし、第4群に分類する。第3群の模写に比べると、本にする際に縮尺を変えたり分割して書写する必要があり、稿本からさらに人の手が加わるため次第に正確さを欠いていくことになるが、田山暦の内容を知る手掛かりが得られるものである。ここでは掲載された図について述べるが、併せて本稿I-(3)の各本の概要も参照されたい。

aは菅江真澄の『凡国異器』の写本にある天明3年田山暦である。天明6年に当時14歳の大槻清儀民治が書写したもので、絵に稚拙さはあるものの、多くの情報を読み取ることができる。『凡国異器』の原本は失われており、この写本が残るのみである。

bは寛政9年(1797)に刊行された橘南谿の『東遊記後編』の「蛮語」の章に掲載された天明3年田山暦である。田山暦が版本に掲載された初例であるが、寛政7年(1795)から始まった南谿の東遊、西遊の一連の著作は大流行し、この図で多くの人が田山暦を知るところとなった。刊行以前の『東西遊記』の稿本や写本も伝わる。

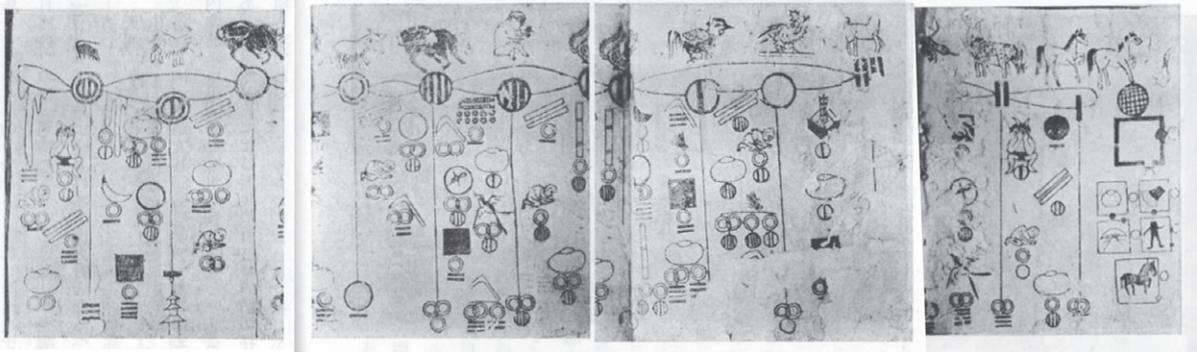
cは山片蟠桃の『夢の代』の版本に掲載された天明3年の田山暦である。『夢の代』の成稿時期を考えると蟠桃は南谿の田山暦の図も見ていたと思われるが、『夢の代』には「今持来スル処ノ暦ヲコヽニ附シテ参考ヲ博クスルノミ」とある。『夢の代』の図は田山暦原本や『東遊記後編』の図からも相当離れたものとなっていることから、他に出回っていた天明3年田山暦の写しをもとにしたものである可能性が考えられる。稿本も残るが、稿本から版本に至る過程でも若干の改変があったことがうかがわれる。

dはシーボルトの『NIPPON』に掲載された天明3年の田山暦である。bとは異なる印象を受ける図柄となってはいるが、シーボルト自身が南谿の著作にある暦を収録したものであることを記している。

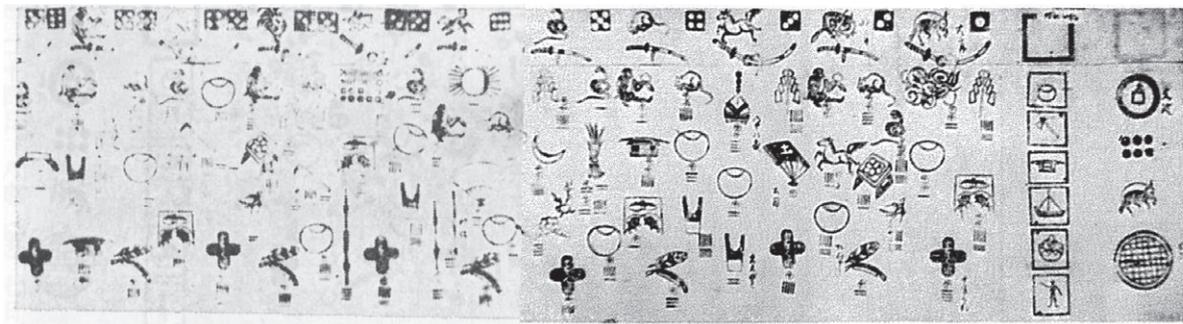
eは松浦武四郎の『鹿角日誌』の稿本にある嘉永2年の田山暦である。武四郎も南谿の田山暦を見たことを記しているが、それに触発されて自身も田山に立ち寄り、八幡家から直接田山暦を入手している。稿本は各頁に二月ずつ収めて原本の体裁を損なわないよう割り付けられており、武四郎自身が正確に描いたものと思われる。本群の他の資料に比べると原本により近いものといえる。

第5群：田山暦類似暦(図9・10)

田山暦そのものではないが、明らかに田山暦に影響を受け、田山暦の要素を取り入れて作られた暦を「田山暦類似暦」とし、第5群に分類する。田山暦の様式を基本的に踏襲しつつも独自要素を加え



a 天明6年暦：満籾館主人「奥南部画暦」（岡田2004複写 原資料神宮徴古館所蔵）



b 文政6年暦〔左〕岡田2004、〔右〕渡邊1976より複写 神宮徴古館旧蔵（原資料焼失）

図9 第5群：田山暦類似暦（1）

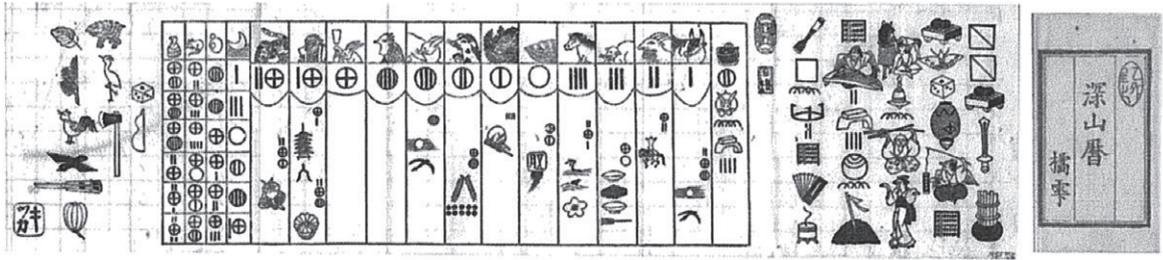
たものと、田山暦をもとにしながらも翻案して独自色を加えて連作したものがあることから、前者を第1類、後者を第2類と細分する。

これらは田山暦そのものではないが、田山暦に関しても様々な示唆を与えてくれるものである。田山暦の存在を多くの人を知る契機となったのは橋南谿の『東遊記後編』であったことは疑いないが、その刊行が寛政9年であるのに対して、満籾館主人の例は天明6年、深山暦の現存最古のものは寛政7年である。南谿以前にも田山暦は一部の人の興味の対象となっていた事がうかがわれる資料でもある。

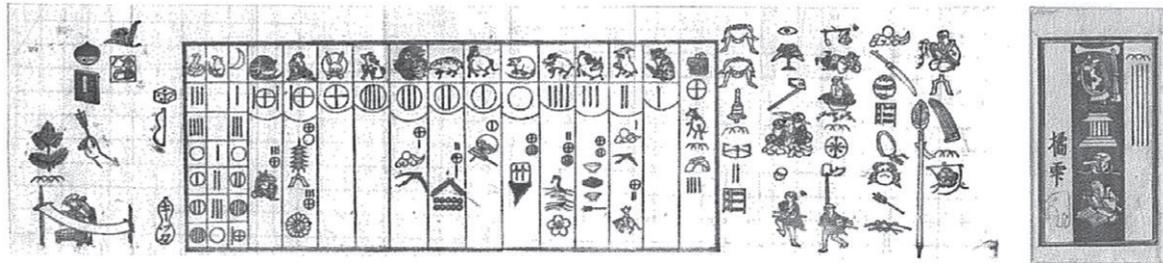
第1類（図9）

天明6年（1786）暦（a）と文政6年（1823）暦（b）があり、それぞれ神宮徴古館所蔵、旧蔵である。aには「奥南部画暦（おうなんぶゑこよみ）」の標題に続けて「此画暦ハ南部鹿角郡田山辺に用る所の暦也（中略）予が友某回國のをりから、めづ〇〇〇〇むるればと、一枚携来りしを乞もとめて、再び斯木に〇〇せつるなり 満籾館主人」とある。田山で用いられる絵暦を、回国の友が一枚携えて来たものをもとに改めて版木に写したということであろう。写された干支や暦注などの意匠を見ると田山暦の実物を見たものと思われるが、独自の工夫も加えられている。友人が回国の過程で入手した田山暦を参照しながら、天明6年の暦を満籾館主人が作ったものであることも考えられるが、満籾館主人の詳細は不詳である。⁽¹⁰⁾

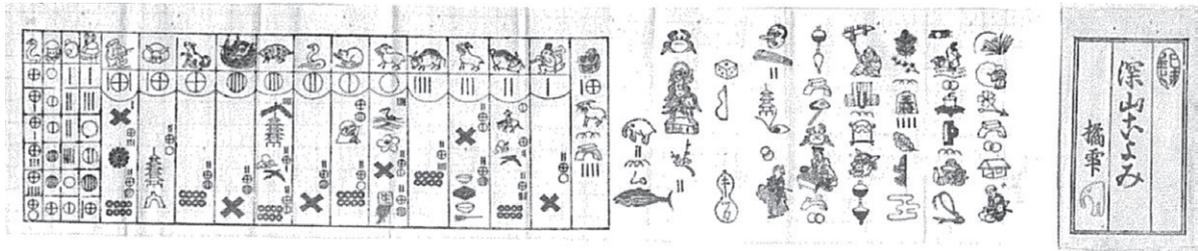
bは戦災で焼失し、写真のみが残る点で第2群と同様であるが、田山暦そのものの写真ではないことから第2群とはせず本群に含めたものである。様々な要素を読み取ることができ、田山暦に関する重要な示唆も得られることから本稿V-(2)において別途論ずることとする。



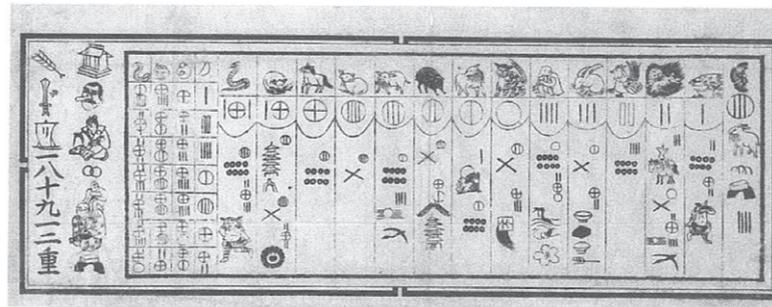
a 寛政7年暦：橘雫「深山暦」（寒川神社2004より複写 原資料寒川神社所蔵）



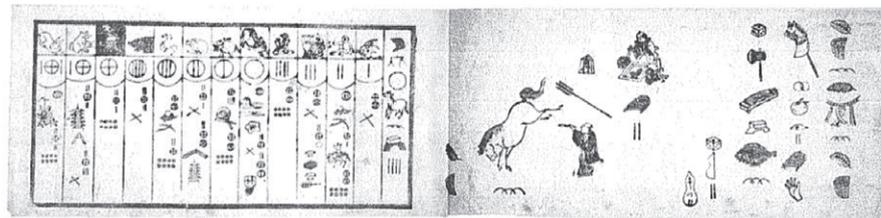
b 寛政10年暦：橘雫「深山暦」（寒川神社2004より複写 原資料寒川神社所蔵）



c 寛政11年暦：橘雫「深山暦」（寒川神社2004より複写 原資料寒川神社所蔵）



d 文化8年暦：橘雫「深山暦」（寒川神社2004より複写 原資料静岡県個人所蔵）



e 天保5年暦：橘雫「深山暦」（寒川神社2004より複写 原資料東北大学附属図書館所蔵）

図10 第5群：田山暦類似暦（2）

第2類 (図10)

多年にわたって同一の様式で作られたもので「深山暦」の暦名と「橘雫」の作者名が入る。橘雫は戯作者市場通笑 (1737~1812) の俳号である。現存が確認されたのは、寛政7、10、11、文化8、天保5年暦で (a~e)、他に書籍に掲載された写真のみが残る天保4年暦がある (岡田1980)。寛政期のものは共通性が高いが、文化、天保期のものには若干の変化が見られる。⁽¹¹⁾ 田山暦の要素を多く取り入れているものの、田山暦に比べると小型で、木判の押印による製作ではなく、版木による一枚刷りである。寛政期のものを見ると、帯封が付き、その大きさに合わせて折られていることから、田山暦のように月ごとの折りとはなっていないなどの特徴がある。

第6群：その他 (図11)

上記のいずれかの群に含めて考えることもできるが、さらなる検討を要するものを第6群として一括した。

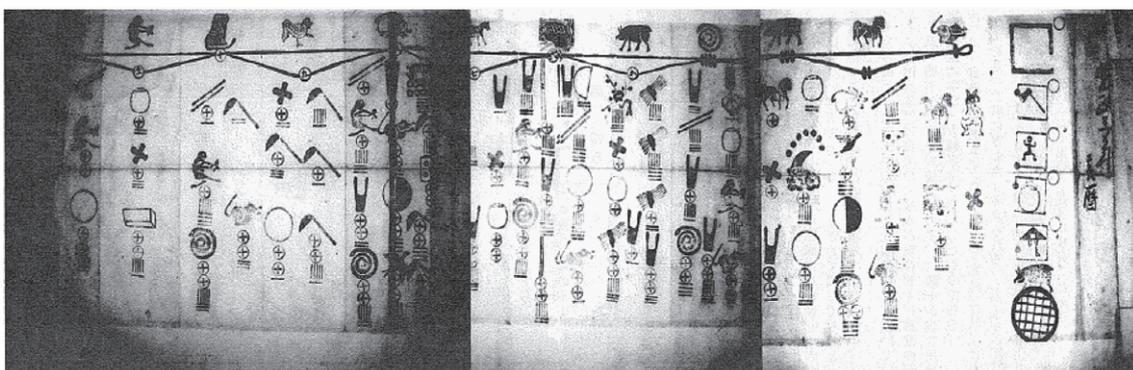
aは一見すると第1群に分類可能なものであるが、本稿Ⅲ-(3)の時期別分類に照射して見ると別の解釈となる。それについてはV-(1)で述べることにする。

その他以下の暦を本群に含めるが、各年それぞれ複数の暦があることから (表2参照)、それらの図については割愛する。

嘉永2年暦や安政7年暦は従来の研究において「現存する田山暦」として扱われてきた経緯があるが (本稿Ⅱ-(1)参照)、その中には第3群や第4群の資料に基づいて二次的に作られたものがあることも判明している (本稿Ⅱ-(2)参照)。各種書籍、論文等に掲載された写真からの確認ではあるが、筆者が見るところでは、嘉永2年暦は第4群の『鹿角日誌』掲載のものを別として少なくとも6~8枚あり (表2-28~35)、安政7年暦も第3群の上山広崇による模写の他に最低でも2枚ある (表2-38・39)。これらの年号の暦の中には、近世に実際に使用された木判を大正、昭和期に用いて作られたものも含まれていると思われる。⁽¹²⁾

また、万延2年暦についても第3群の小笠原白雲による模写の他に1枚ある (表2-41)。前者が手書きであるのに対し、後者は木判が使用されたものであるが、その判は現代に模刻されたものであることが判明している。⁽¹³⁾

これらの中には第1群に分類可能なものが含まれている可能性もあるが、ここに挙げた嘉永2年暦



a 寛政3年暦 (秋田県立博物館菅江真澄資料センター 2020より複写 秋田県立博物館所蔵)

図11 第6群：田山暦関連資料

は岡田が挙げた複製品の特徴を持つものであり、安政7年暦や万延2年暦にもそれと共通する要素が見られる。近世に作られたものがあるとするのであれば相応の根拠が求められることになる。

この他に現存する田山暦として2004年に岩手県二戸郡の旧家から発見された明治9年のものを挙げ、それを太陽暦採用後の田山暦で、明治時代にも田山暦が作られていたことを示すものであると評価する考えもある（工藤2006）。通常暦首にある諸神が最後にあり、12月はなく、6月、10月は空白であるが、庚申、甲子、節分、社日など、押印されている絵文字は後述の後期田山暦の特徴を持つもので、旧暦の月日で暦注が示されている。後日同じ家から同じ明治9年のものがさらに1枚発見された⁽¹⁵⁾というが、明治期のものは他に確認されておらず詳細な検討が必要なものとする。

(3) 田山暦の時期別分類

前節で分類した第1群から第6群は、群番号が進むほど現存資料との関係性が薄くなる。暦面に示された年号が実際の使用年と一致する可能性が高いのは、第1群と第2群であることから、それらを年代順に並べて（図4・5）、その変遷を追うと、田山暦の基本的なスタイルは終始変わらないものの、天明期のものと天保期のものでは一見していくつかの相違点があることがわかる。

その点について工藤紘一は使用された木判の印影を詳細に検討し、記載事項の変遷、手書きと判の割合、判の変遷を検討し、天明3年と寛政12年の間に記載事項数が増え、手書きから判の押印への移行が進んでいること、文化13年から天保6年の間に古い判から新しい判に切り替わっていることなどを指摘している（工藤2004）。

岡田芳朗も木判の印影を比較するなど（図12参照）詳細な検討を行い、文化13年以前を前期、天保6年以降を後期と、田山暦を前期、後期の二期に区分した（岡田2004；2005）。

岡田の二期区分は妥当なものであり、工藤が見いだした木判の切り替え時期とも整合性を持つものであるが、両氏の指摘にはない大きな違いが前期田山暦と後期田山暦の間にある。その点を踏まえて以下に各期の概要を記す。分類結果については表2に示した。

①前期田山暦：特定暦注優先配置型（図4・図6a）

前期田山暦において注目すべきは日付の配置である。天保6年以降の暦は各月の暦注が日付の早い順に配されるのに対し、文化13年以前の暦は日付の順序は無視され、特定の暦注が上位、あるいは下位に配置される。例えば、猿の絵文字で表される庚申の日（図12参照）は、天明3年5月ではその日が月末の30日であっても最上位に、×の絵文字で表される十方暮の日は、文化13年1月ではその日が月初めの二日であっても最下位にそれぞれ配置され、「特定暦注優先配置型」ともいべきレイアウトとなっている。これに対し、天保6年以降の暦はそれらが優先的に上位や下位に配置されることはなく、日付順に並べられる。こうしたことから文化13年と天保6年の間に画期が見いだされることから、本稿においても文化13年以前の暦を「前期田山暦」、天保6年以降の暦を「後期田山暦」と分類することとする。

そうした視点で見ると、前期田山暦は、庚申の日の他にも己巳の日も上位に配される傾向があり、十方暮の他に八専も下位に配される。信仰に関わる日が上位に、警戒を要する日が下位に置かれることになる。田山暦はもともと全ての日を掲載したものではないが、選択した日をさらに配置を工

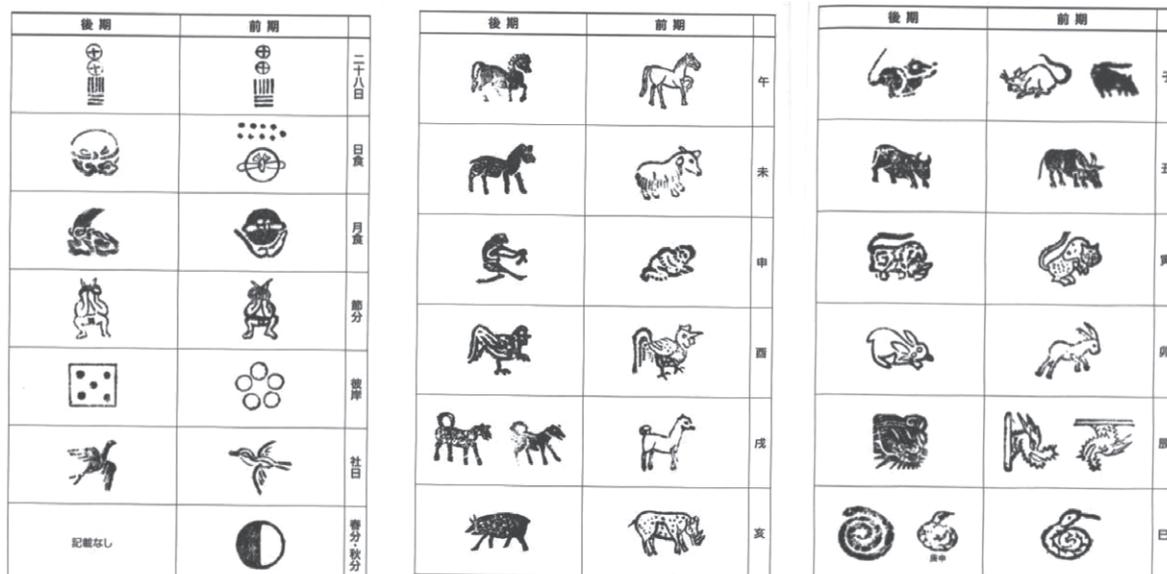


図12 前期田山暦と後期田山暦の木製の判の印影（岡田 2004）

夫することにより、視認性を高めたのが前期田山暦の特徴であり、特に庚申の日に対する注目度が高い暦ともいえよう。

②後期田山暦：全暦注日付順配置型（図5・図6b）

前期田山暦においては、庚申の日はいつかというような見方に便利なのに対し、後期田山暦は日付の早い順から暦注が配置されており、次に来る暦注は何かという見方に適している。「特定暦注優先配置型」の前期田山暦に対し、後期田山暦は「全暦注日付順配置型」と言うことができよう。

こうした特定暦注優先配置型から全暦注日付順配置型への転換は、新たな木判への切り替えとも連動するものであるが、現存田山暦で見るとその転換は文化13年と天保6年の間になされたことになる。この間は19年もあることから、いったん断絶した後に復活したものが後期田山暦とも考えられるが、文化13年暦には岡田が指摘するように、初甲申が見られず、甲子に掲載されるなど、既に後期田山暦の要素も現れている（岡田 2005）。また、本稿Vで述べるように、新たな木判は文化14年にはできていた可能性が考えられる。こうしたことなどから、前期田山暦から後期田山暦への転換は文化期末から文政期初頭になされていたと考えられる。この転換により特定暦注の視認性は低下したが、汎用性が高まったと見ることもできる。

IV 資料間の比較

(1) 田山暦と伊勢暦の比較

田山暦は折本形式である点で伊勢暦（図13参照）と共通する。版元の八幡家には幕末期の伊勢暦が十数点残されているとされ（工藤 2006）、田山暦の製作にあたっては伊勢暦を参照したものと推定される。一見して両暦の情報量は同量ではないことから、田山暦が伊勢暦を参照しながら作られたとしても、掲載する日や暦注には意識的な選択があったものと思われる。田山暦が伊勢暦から何を取捨選択したのかを見ることは田山暦の性格の把握に直結する。ここでは現存最古の岩手県立博物館所蔵

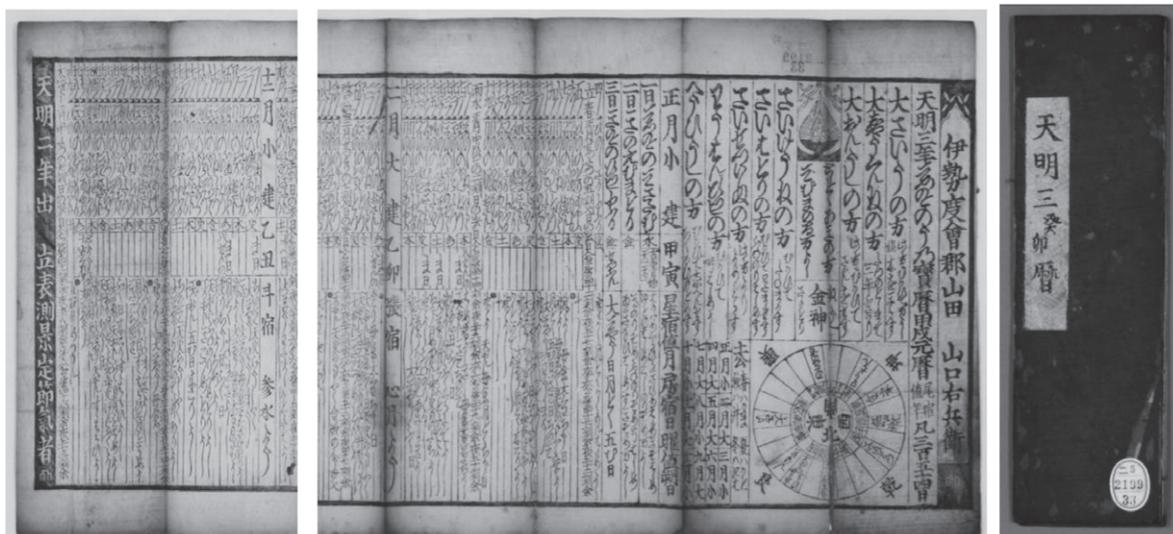


図13 天明3年伊勢暦(2月9日～11月28日省略)

(早稲田大学図書館古典籍総合データベースより複写 原資料早稲田大学図書館所蔵)

の天明3年田山暦(図2参照)を例に、同年の伊勢暦(図13参照)との比較を試みる。

①伊勢暦と田山暦の全般的な相違点

- 伊勢暦は1年全ての暦日を記載するのに対し、田山暦は特定の日のみが記載され、記載されない日の方が多い。
- 伊勢暦は各日を1行とし、各暦注を1行に納めるのに対し、田山暦は暦注ごとに日が記載される。伊勢暦は同じ日付が複数記載されることはないが、田山暦では同じ日付に異なる複数の暦注が宛てられる場合は、2月23日の初甲申と十方暮のように一月の中に二度記載される日もある。
- 伊勢暦の各日は日付の若い順に横並びに配列されるのに対し、田山暦は抽出された日のみ各月2行で縦並びに配列される。
- 伊勢暦は文字の位置にかかわらず表紙の大きさに合わせて折られるのに対し、田山暦は月の変わり目に折り目がくるように折られる。そのため月ごとの表示が可能となっている。

②伊勢暦と田山暦の暦注における相違点

- 天明3年の頒暦は暦法的には宝暦暦によるものである。宝暦暦期の伊勢暦の撰日部分の下段の暦注は貞享暦期に比べると3種増えて以下の23である。その中で、岩手県立博物館所蔵天明3年田山暦⁽¹⁶⁾に採用されているのは下線を付した地火日のみである。

受死日、十死日、五暮日、婦忌日、血忌日、重日、復日、天火日、地火日、大過日、狼藉日、滅門日、時下食、歳下食、凶会日、天赦日、神吉日、大明日、鬼宿日、往亡日、月徳日、母倉日、天恩日

- 伊勢暦の下段にはその他に以下のような「〇〇よし」の記載があるが、そのうち田山暦に採用されているのは下線を付した3種のみで、同じ天明3年田山暦で後述する蛇足庵所蔵版には「みそつくりよし」が加わる。

田うへよし、たねまきよし、田かりよし、たねかし(種浸し)よし、くさかりよし、むぎかりよ

し、木こりよし、やたてよし、くらたてよし、みそつくりよし、みそすつくりよし、みそさけつくりよし、あさまきよし、神よし、井ほりよし、入学よし、いちたちよし、つめとりよし、(中略)すすはらひ正月ことはじめよし、すすはらいよし

- 伊勢暦では「田うへよし」が3回、「たねまきよし」が10回、「田かりよし」が7回であるのに対し田山暦ではそれぞれ1回、8回、7回である。
- 伊勢暦の中段と下段の間の暦注は、以下の13種類あるが、その内田山暦で用いられたのは、下線を付した11種である。真日は八専でわかる日であることから、外れたのは実質的には天一天上の⁽¹⁷⁾みである。

天一天上、八専、真日、社日、彼岸、十方暮、土用、八十八夜、入梅、半夏生、三伏、二百十日、節分

- 伊勢暦中段の十二直については田山暦では全く用いられない。
- 伊勢暦上段の日付の60干支については、かのえさる(庚申)、つちのとみ(己巳)のみが抽出⁽¹⁸⁾される。
- 二十四節気と雑節については、伊勢暦には全てが入るのに対し、田山暦では冬至、小寒、大寒(前期にはなし)⁽¹⁹⁾のみが表される。
- 伊勢暦にはないにもかかわらず田山暦に掲載されるのは、馬の絵文字で表される初甲申、龍の絵文字で表される初壬辰である。

天明3年の伊勢暦と田山暦を比較すると以上のような相違が見られるが、田山暦は基本的に伊勢暦に準じているものの、特定の暦注等を重視していることがわかる。

伊勢暦の中段と下段の間の暦注は天一天上以外は田山暦でも採用しているが、これらは他の略暦においても普遍的に掲載されるものであり、そのことから田山暦は略暦的な要素も持っていることがわかる。

それに対して伊勢暦中段の十二直の暦注は全く顧みられることはない。下段暦注もほぼ採用されない中で、地火日のみが抽出されており、地火日に対する特別の意識が表れているものと思われる。

下段の中の吉凶の部分を見ると、「田うへよし」や「たねまきよし」の回数は田山暦の方が回数は少なくなっているものの、掲載された日は伊勢暦から逸脱するものとはなっていない。一方、田山の生業と関係するはずの「あさまきよし」は伊勢暦には5回掲載があるにもかかわらず、田山暦では全く採用されていない。田山暦で何らかの選択の意識が働いていることになるが、その点については本稿Ⅵで考察することとする。

(2) 同年異暦の比較

同じ年の田山暦が複数確認されている例は第4群の掲載田山暦を除くと天明3年、天保6年、嘉永2年、安政7年のものがあるが、嘉永2年、安政7年の暦は第3群や第6群に分類されるものである。第1群の現存田山暦と比較可能なものは天明3年と天保6年のものであり、完存品で比較できるのは天明3年の岩手県立博物館所蔵暦と蛇足庵所蔵暦となる(図4参照)。前者を県博暦、後者を蛇足庵暦と仮称し、以下に比較の概略を述べる。なお、全体像が不明な天保6年暦については本稿Ⅴ-(1)で触れることとする。

蛇足庵暦は2012年にその存在が明らかになり、翌年には岡田芳朗、工藤絃一によりそれぞれ比較がなされている（岡田 2013；工藤 2013）。⁽²⁰⁾ 詳細は割愛するが、概ねの共通理解としては、県博暦にはない味噌玉の表現が蛇足庵暦にあること、地火日が表されるのが県博暦では2日であるのに対し、蛇足庵暦では17日と大幅に増えていること、蛇足庵暦には節分の表現がないことなどが挙げられている。

工藤は、完成形は同じであるべきという前提のもとに蛇足庵暦や『東遊記後編』で橋南谿が紹介した暦を試作品と位置付け、「蛇足庵所蔵暦は本来は外部に出すべきでない、思考途中の暦が何かの事情で流出したのではないだろうか」とするが（工藤 2013：12）、岡田は「同一年でも内容の違う完成本が存在する可能性がありうる」、「味噌造り吉を掲載したり、地火日を多く記した田山暦と、それを省略したものが同一年に製作された可能性を考えても良い」とし、但し、味噌玉掲載の系統の田山暦が少数しか作られなかった上、早い時期に製作が中止されたのではないかと推定している（岡田 2013：5）。

ここで改めて味噌玉と地火日に注目してみると、味噌玉は他の田山暦には全く見られないのに対し、地火日は、後期田山暦で数が増える。地火日は、土を動かすこと、礎を置くこと、柱建て、井戸掘り、種蒔き、築墓、葬送などに凶とされる日であるが、その根本は大地に火気激しく、地気炎土の凶日ということにある。

範とされた伊勢暦における天明3年の地火日の日数の総計は21日であるが、県博暦ではその内2日しか抽出されていないのに対し、蛇足庵暦では17日抽出されている。他の現存田山暦で見ると、天明7年暦では4日、享和2年暦では1日、文化13年暦では4日である。後期田山暦の段階になると網羅的に地火日が抽出される他、天火日も抽出されるようになる。前期田山暦の中において蛇足庵暦は特異な感を受けるが、田山暦全体を通してみると、程度の差はありつつも地火日を意識する場合が初期からあったことになる。

地火日に対する意識は大地の火気に対する警戒と受け取ることもできるが、そうした火気に対する意識は初壬申にも見ることができる。初壬申は伊勢暦においては特別視されるものではなく、鹿角地方特有のものであり、火伏の行事の日とされる。鹿角地方という土地柄を考えると、土を動かすことや大地の火気に対する警戒というのは鉱山に関係するものである可能性も考えられよう。鹿角地方は金や銅を産出した尾去沢鉱山の膝元でもあり、田山一帯は鉱山の燃料材の供給地でもあった。地火日に向けられた意識は、鉱山における事故への警戒を反映したものである可能性も考えられる。

味噌玉については「味噌造りよし」を表したものとされる（工藤 2013）。天明3年伊勢暦には「みそつくりよし」、「みそすつくりよし」、「みそさけつくりよし」も含め9日あるが、蛇足庵暦ではその内8日が抽出されている。

県博暦と蛇足庵暦を見比べると、優先配置された庚申、己巳、八専、十方暮の位置はほぼ同じ位置にあり、地火日や味噌玉はもともとあった隙間に押印されたように見える。見ようによっては、県博暦はベースともいえる暦で、蛇足庵暦はベースの暦の隙間を利用して依頼主に応じたカスタマイズを施したものと考えることもできる。享和2年田山暦も県博暦と同様に優先配置で押印された暦注の絵文字の間に隙間が見られ、後に追加で押印することも可能となっている。こうしたあり方は、基本とすべき暦注を優先配置で押印したものをベースの暦としてあらかじめ準備しておき、それ以外は依頼

者の生業などに即した暦注を選択的に押印したことをうかがわせるものである。版木によらず、手書きと木判の押印のスタイルを維持したのはこうした柔軟な対応を可能にするためでもあったと考えられよう。南谿の『東遊記後編』や真澄の『凡国異器』に見られる暦が県博暦と同じように見えながらも微妙に違うのも、こうした柔軟性によるものといえよう。

松浦武四郎は『鹿角日誌』において「正月の市日には毎年毛馬内、花輪にて是をうるよし」と記している。ベース部分は伊勢暦入手後速やかに年末頃に作られ、その後に依頼者の生業などに応じた暦注が加えられて売られた可能性が考えられる。木製の判は携帯可能なものでもあることから、版元(21)の自宅の他、出向いた先の市の場で年が明けてから仕上げられることもあったであろう。

同じに見えながらも配置された暦注が微妙に異なるのは、ベース部分は全てに共通させつつも、異なる部分は依頼者によって変えたからであり、後述するように、その異同に鹿角地方の生業も垣間見えてくる。

V 分類と比較から見える田山暦の新たな側面

ここまでの分類と比較を通してみると、それぞれの資料の新たな側面が見えてくる。ここでは例として第1群に分類した一関市博物館所蔵天保6年(1835)暦、第5群第1類に分類した神宮徴古館旧蔵文政6年暦、第6群に分類した秋田県立博物館所蔵寛政3年(1791)暦それぞれの新たな側面を述べてみる。また、それらを通してみると前期田山暦と後期田山暦の画期の具体的な時期や、田山暦と盛岡暦の関係性についてなど、従来の研究にはない新たな知見も得ることができる。

(1) 一関市博物館所蔵天保6年暦の意義

この暦(図5g)は岡田や工藤の研究において取り上げられることがなかったからか、これまで明確な位置付けが与えられてこなかったが、一関市博物館の図録『塵も積もれば一盤溪先生の貼り交ぜ帳』(一関市博物館2006)に見ることができる。大槻盤溪は玄沢の息子にして漢学者として知られた人物で、『言海』の編者文彦の父でもある。『塵積成山』などと題された天保7年から明治初年頃までの貼り交ぜ帳が残されており、天保6年田山暦はその中に貼り込まれたものである。

何年の暦であるかについては表された干支や暦注の日付等から天保6年のものとわかる。天保6年の田山暦は他に第1群に分類した東北大学附属図書館所蔵のものが知られる。そちらは欠損品であるが、工藤絃一の研究により天明6年のものと特定されている(工藤2004)。一関博物館所蔵の例は年を表す干支に「午」と注釈が書き込まれているが、木判の印影は後期田山暦の「未」のものであることから、注釈は誤認によるものであり、内容的にも天明6年末年のもので間違いはない。暦首部分と正月の部分は両者の比較が可能で、押印時の微妙な差はあるものの、使用された判や配置は同じであること等から一関博物館例も東北大学附属図書館例と同様第1群に分類したものである。同年の田山暦が複数残る例として、天明3年田山暦とともに貴重なものといえよう。

図録では貼り交ぜ帳の見開き分の暦首から4月までしか見えないが、それだけでも東北大学附属図書館例の欠落部分の2~4月を補うことができる。筆者はまだ全体像を確認していないが年末部まで残っているとすれば天保6年暦の完存品の初例となる。

使用された木判の印影や暦注の配置は後期田山暦の特徴をよく表しており、基本的には後期田山暦に分類できるものであるが、天保10年田山暦以降に継続的に見られる年号の絵文字はない。東北大学附属図書館例が後期田山暦の中で例外的に年号の絵文字がないのではなく、天保6年段階ではまだそれが行われておらず、絵文字で年号が表わされるようになるのは天保7年から10年の間であることが判明した。

(2) 神宮徴古館旧蔵文政6年暦から知る田山暦と盛岡暦との関係

神宮徴古館旧蔵の文政6年暦(図9b)は田山暦そのものではなく、第5群第1類に分類した田山暦類似暦であるが、内容的に盛岡暦との関係性もうかがうことができる興味深い資料である。年代的にも現存最古の盛岡暦の文政13年(1830)と確認上最古の文化7年(1810)の盛岡暦(明治26年の『史料通信叢誌』第1編に掲載され、その後所在不明)の間の20年の空白期間、及び、前期田山暦と後期田山暦の間に見られた文化13年(1816)から天保6年(1835)の間の19年の空白期間の重なる時期のものであり、それらの空白を補う資料ともいえる。

この文政6年暦は、全体的な様式は田山暦に通じていながらも、月の大小の表現は田山暦とは異なり、大小の刀で表され、月名もサイコロの目で表されている。これらは文化7年盛岡暦や文政13年盛岡暦をはじめ、それ以降の盛岡暦に通時的に見られる特有の表現である。

年号は、寛永文字銭の裏(背)で「ぶんせい」を表しているが、この表現も文政13年盛岡暦と同じである。こうした表音的な絵文字表記は盛岡暦の特徴でもあり、文化7年盛岡暦においても、手紙(文)と鋏で「ぶんか(ぶんくわ)」が表されている。

一方、田山暦においては、年は当初から干支で表されており、前期田山暦の全てと後期田山暦初頭は全て干支の絵文表記である。年号の絵文字が入る初例は天保10年(1839)であり、以降の全てに入る。2枚残る天保6年(1835)田山暦にはそれがいないことから、田山暦においては後期田山暦に入った後に取り入れられた要素ということになる。絵暦の歴史としては田山暦の方が古く、盛岡暦はその影響のもとに成立したと考えられるが、要素で見ると、こうした年号の表音的な絵文字表記は田山暦の方が盛岡暦から受けた影響と見ることができよう。

文政6年田山暦類似暦は戦災で焼失していることから、写真のみからの確認となるが、暦注に用いられる絵文字は前期のものとも後期のものとも異なる。ただ、庚申などを見ると、前期のものより後期に近い。また、前期末の文化13年暦に見られ、以後後期田山暦に掲載される甲子も見られる。暦注配置を見ると、全暦注が日付順の配置にはなっておらず、特定暦注優先配置型を保っている。

このように見ると、この文政6年暦には盛岡暦との関係性がうかがわれるとともに、田山暦の前期から後期への過渡的な要素もうかがわれる。範とした田山暦を類推するならば、特定暦注優先配置型の中に甲子の絵文字が加わるころからは文化13年田山暦に類似性が見え、絵文字からは後期田山暦の木判との類似性がうかがわれる。文政期の田山暦は未発見であるが、特定暦注優先配置型が残存しつつも、甲子の日に加わり、後期田山暦の判が用いられた過渡的な姿が想定されることになる。

(3) 秋田県立博物館所蔵寛政3年暦から知る後期田山暦への移行

秋田県立博物館所蔵の寛政3年田山暦(図11a)は、「工藤野松書簡等貼合巻物」にある。図録

『菅江真澄、旅のまなざし』（秋田県立博物館編 2014）に掲載され、近年同館菅江真澄資料センターだよりの『かなせのさと』でその全体像が紹介された（秋田県立博物館菅江真澄資料センター 2020）。同誌では、「寛政三年の当館資料は新出である上、現存では三番目に古い田山暦ということになる」と評価されている。その点を考慮するならば第1群に分類させるべきものであるが、本稿では以下のように考え第5群に分類した。

この暦は貼合巻物に仕立てられてはいるが、暦面には本来の折り目が月ごとに見え、全体的なスタイルは田山暦そのものとなっている。また、月朔や月の大小、暦注は紛れもない寛政3年のものであるため、一見すると現存田山暦に分類できそうなものではあるが、実は大きな矛盾がある。

本稿Ⅲ-(3)の時期別分類に照らし合わせると、寛政3年（1791）は、年代的には前期田山暦の段階である。それにもかかわらず、この暦に用いられた木判は後期田山暦の判と同一である。また、主に後期田山暦に使われ、文化13年のより古い暦には載らない甲子の絵文字も見られる。暦注配置は前期田山暦の特定暦注優先配置型とは明らかに異なるが、だからといって後期田山暦の特徴の全暦注日付順配置型にもなっていない。

後続する年代の現存田山暦の寛政12年（1800）暦、享和2年（1802）暦、文化13年（1816）暦は、いずれも前期田山暦のスタイルを踏襲していることから、寛政3年（1791）暦のみ突出して古い時期に後期田山暦の木判が使われたことになる。一旦後期の判の使用に移行したものが、すぐに前期の判に戻って十数年続き、再び後期の判に移行したのではいかにも不自然である。この寛政3年暦は後期田山暦の木判を使用して過去の暦を製作したと考えるのが妥当ということになる。

5月以降の月名表示が田山暦独特の表現によらず、丸の中に漢数字で表されているのもその裏付けとなる。暦注部分は八幡家の後期田山暦の木判が押されたものの、手書き部分は別の手によったため、月名については独特な表現法がわからなかった可能性が考えられる。

製作時期は、木判の切り替え時期から考えると上限は文化期末、年号に絵文字表記が用いられていないところから考えると下限は天保10年となるが、巻物の主の秋田藩士にして俳人の工藤野松の没年は文政元年10月（文化15年4月25日に改元：1818）であること、第1群の現存田山暦で見ると文化13年までは前期田山暦の木判が用いられていることを考慮すると、この「寛政3年」暦の製作時期は文化14年（1817）前後に絞られる。

そうなるこの暦は、文化14年前後に、後期田山暦の木判を使用し、その当時の田山暦を参考にしながら、二十数年前の寛政3年の暦情報で作られた暦ということになる。他の現存田山暦と同列に扱うことはできない資料ということにはなるが、筆者の推定する製作時期が妥当性を持つならば、別の重要な意味を持ってくる。

現存田山暦だけで見ると前期田山暦と後期田山暦の転換期は文化13年から天保6年の間の19年間の幅で認識するしかなかったが、この「寛政3年」暦の製作が文化14年前後だったとすれば、文化13年暦の段階ではまだ前期田山暦の木判が用いられつつも甲子の絵文字が現れ、文化14年前後には甲子も含めて後期田山暦の木判がほぼ揃えられたことになる。空白期間に入って程なく後期田山暦への転換がなされたことを示唆する資料と見ることができる。

本稿Ⅴ-(2)の文政6年暦と合わせて考えるならば、前期から後期への切り替えは一気に行われたというよりも、まず、文化13年暦に甲子の掲載が加わり、次に文化14年頃に木判が新たなものに更

新され、文政6年以降に暦注配置が全暦注日付順配置型に転換され、天保7年以降に表音的な年号表記が加わるという段階的な変遷があったことが推定される。

現存田山暦で見る前期と後期の間の19年の空白期間は田山暦の一時的な途絶さえ思わせる長さであったが、こうしたあり方は、田山暦がその間も継続的に製作されていたことを示唆するものと見ることができよう。

VI 田山暦と生業

現存田山暦と伊勢暦との比較や田山暦の同年異暦を比較する中で、生業との関わりも見えてきた。

田山暦と生業の関わりについては、近世以来、農作業、特に稲作との関係で語られてきた。現代においても、多くの著作で同様に語られ、2004年に岩手県指定有形民俗文化財となった岩手県立博物館所蔵の天明3年田山暦の概要説明においても「田山暦は、江戸時代中期の度重なる飢饉の中で、農民救済のため農業経営の目安として考え出されたものである。読み書きできない人にも理解しやすいように絵で組み立てた暦で、農具や生活用具、十二支の動物などすべて身近なもので表現している。初めは手書きであったが喜ばれて需要を増し後に木活となった。⁽²²⁾ (以下略)」とある。

暦を一見して目に付く鎌の絵文字が「田刈りよし」、稲束の絵文字が「田植えよし」を表すものと説明されるからであろうが、伊勢暦との比較で見たように、これらの日付は伊勢暦の暦注の日付に重なるものであった。即ち、頒暦に基づいた全国標準の暦注からそのまま抽出したものであり、田山という地域性については一顧だにされていない。当然ながらこの日付によって作業を行ったのでは地域の実情に合わないことになる。また、体制的にも文字の読めない人が絵暦を見ながら自分の判断で田植えを行ったとは考え難い。前期田山暦に掲載された「田植えよし」は1日のみであるが、地区の田植えが1日でできるはずもなく、一定の集団の中で協同で順番に行われたことが想定される。田山の古文書の残存状況から見ても（岩手県立博物館1987他）、それを識字者が介在せずに行っていたと考えるのは無理がある。

それに、田山はそもそも稲作よりも稗作が盛んな地域であった。そのことは、田山の阿保家の「御巡検御用諸綴」中の天保9年（1838）幕府巡検使来訪に備えた覚書に「当村は稗田鹿田の場所に付、銭定高ニて百石ニ付四拾貫文定ニ御座候（後略）」とあることや、松浦武四郎の『鹿角日誌』の田山村の説明に「人家三十軒斗。田も少しあり。然れども稗粟を常食とし麻作りを稼とす」とあることからわかる。詳細は略すが、このことは地元に残る他の文書類や藩の記録からも裏付けられる。

稗や粟は「種蒔きよし」の暦注に関連しそうだが、田山暦にあるそれはやはり伊勢暦に重なるものであり、11月にも「種蒔きよし」の絵文字が見られる。旧暦において11月は冬至を含む月であり、田山でその時期に種を蒔くことがよいとは考え難い。

また、武四郎が挙げた麻作りについて見ると、古来田山を含む鹿角地方一帯は「狭布の里」即ち、麻布の産地として知られ、歌枕ともなっている。菅江真澄が田山暦のことを記した日記『けふのせわのゝ』の題もそれに由来するものである。伊勢暦下段には「あさまきよし」の暦注もあり、天明3年暦で見ると計5日を数える。田山にとって麻は重要な産物であるにもかかわらず、田山暦には採用されていないことになる。

このように見ると、田山暦の農作業に関する暦注は吉凶判断の参考にすることはあったとしても、実際の農作業の目安としての役割は極めて低いものであったといわざるをえない。

農作業以外の点では同年異暦の比較で見た蛇足庵暦の「味噌づくりよし」や「地火日」が目を引く。味噌は鹿角地方においては救荒食としての位置付けがある。天明の大飢饉の際にも、春麦の出るまでは何としても青物だけで食いつながなければならぬ、山野の青草を食するには味噌さえあればどうにかなる、との趣旨の書簡も残されている（鹿角市 1985：400）。天明3年の田山暦は前年末に作られたと思われるが、天明2年も不作であったことが記録に残されており、天明の大飢饉の兆候に対する警戒が「味噌づくりよし」の暦注の採用を促した可能性も考えられる。また、鹿角地方の味噌に関しては尾去沢鉦山向けの御用味噌の天明期の書留も残っており（鹿角市 1985：403）、鉦山向けの味噌が大量に必要とされたことを反映したものである可能性も考えられる。

蛇足庵暦の地火日の多さは前期田山暦にあっては特異なものであるが、後期田山暦段階では重視される暦注の一つである。地下日は大地の火気に対する警戒で、種蒔きの吉凶判断にも用いられるが、種蒔きについては「種蒔きよし」の絵文字が全ての田山暦に見られることから、他のことに対する警戒を考慮すべきと思われる。先に触れたように鉦山労働との関係も候補に挙がるが、その点についてはさらに検討が必要である。

以上のように、田山暦はこれまで言われてきたほど農作業との直接的な関係性が強いものではなく、他の生業との関係も視野に入れるべきものであることもわかった。しかし、いずれにしろそれらは具体的な作業日の目安というよりも、吉凶判断の参考程度の用い方だったとみられる。

Ⅶ 田山暦と信仰

前期田山暦と後期田山暦を比較すると、特定の暦注を優先的に配置するのは前期田山暦の特徴といえるが、その中でも常に最上位に配置されるのが庚申の絵文字である。次いで己巳も上位に配置されるが、文化13年暦では己巳より甲子が優位にある。これらはそれぞれ庚申待ち、巳待ち、甲子待ちの信仰に関係するものであり、日付の順序を無視して他の暦注より上位に押印される。その中でも前期田山暦では庚申が一貫して優先されているところから、この暦と庚申信仰の結び付きの強さを知ることができる。

庚申が最上位に配置されていることで、各月の庚申の日の有無、有る場合は何日なのか直ちにわかる。また、最上位を横断的に見ることによってその年が平年の六庚申なのか、あるいは凶作とされる五庚申なのか、豊作とされる七庚申⁽²³⁾なのかも一目瞭然である。そうした目的に応じた見方をすると、必ずしも文字が読めない人のためというよりも、どの人にとっても極めて視認性が高い暦だったといえる。

庚申信仰の痕跡は現存する庚申塔から辿ることができるが、田山に残されている庚申塔は1基のみであり、それだけを見るとかつて盛んだった様子をうかがうことはできないが、旧安代町内で見ると近世の庚申塔は24基確認されている（安代町史編さん委員会編 2009）。田山のものはその中で2番目に古いもので、青面金剛が彫られ、銘文に「明和二年乙酉（1765）六月十五日奉供養 金沢惣右衛門・八幡源右衛門」とある（岩手県教育委員会編 1980）。ここで注目されるのは「八幡源右衛門」の

表3 鹿角市の石造物（鹿角市史編さん室 1990 を改編）

a 種類別・年代別造立数

種類	祭祀講							
	念仏				日待			
	念仏供養	六字名号	千日供養	百万遍	題目	庚申	甲子	二十三夜
慶長 (1596-1614)								
元和 (1615-1623)								
寛永 (1624-1643)								
正保 (1644-1647)								
慶安 (1648-1651)								
承応 (1652-1654)								
明暦 (1655-1657)								
万治 (1658-1660)								
寛文 (1661-1672)								
延宝 (1673-1680)								
天和 (1681-1683)								
貞享 (1684-1687)								
元禄 (1688-1703)			1					
宝永 (1704-1710)						1		
正徳 (1711-1715)					1			
享保 (1716-1735)	1	3				2		
元文 (1736-1740)						1		
寛保 (1741-1743)								
延享 (1744-1747)								
寛延 (1748-1750)						3		
宝暦 (1751-1763)						2		
明和 (1764-1771)						1		
安永 (1772-1780)				1		2		
天明 (1781-1788)	1					5		
寛政 (1789-1800)				2		9		
享和 (1801-1803)						1		
文化 (1804-1817)		1		8		7		
文政 (1818-1829)	1			1		6	1	
天保 (1830-1843)						4	1	
弘化 (1844-1847)						4		
嘉永 (1848-1853)						8		1
安政 (1854-1859)						2		
万延 (1860-)								
文久 (1861-1863)						2		
元治 (1864-)						3		
慶応 (1865-1867)					1	2		
江戸時代計	3	4	1	12	2	65	2	1
時期不詳		4		2		40		
明治 (1868-1911)						12		
大正 (1912-1925)						7		
昭和 (1926-1988)					1	10		
合計	3	8	1	14	3	134	2	1

b 種類別・地区別造立数

		祭祀講							
		念仏				日待			
		念仏供養	六字名号	千日供養	百万遍	題目	庚申	甲子	二十三夜
花輪	碑	1	1		2		10	1	1
	像容						2		
	建造物						1		
尾去沢	碑	1	2			1	25		
	像容						1		
	建造物								
八幡平	碑				2	2	13		
	像容								
	建造物								
柴平	碑				1		11		
	像容						1		
	建造物								
大湯	碑	1					14		
	像容						1		
	建造物								
錦木	碑		4		9		21		
	像容								
	建造物								
毛馬内	碑		1	1			34	1	
	像容								
	建造物								
全	碑	3	8	1	14	3	128	2	1
	像容						5		
	建造物						1		

名である。田山暦の創始者とされ、暦にも作者としてその名が記された「善八」は「源右衛門」と称しており、平泉から浅沢村を経て田山の庄屋の金沢家に身を寄せ、後に肝入りの八幡家に婿入りしてやがて分家し、善八は三代にわたって襲名されたとされる（安代町史編さん委員会編 2009：214）。⁽²⁴⁾ 庚申塔に見られる二人の名はこうした由緒と整合性を持つものである。

松浦武一郎が、正月の市日に田山暦が売られたと記した毛馬内、花輪を含む秋田県鹿角市の状況に

目を転じると、表3に見られるように、全石造物の中では庚申塔が他を圧倒し、市域で計134基（江戸期65基、不明40基、明治以降29基）確認されている（鹿角市史編さん室1990）。最古は宝永期であるが、5基以上見られるようになるのは天明以降である。地域別で見ると最多は毛馬内の34基で、⁽²⁵⁾ 鉾山を抱える尾去沢が26基と次ぐ。

このように見ると、田山暦が作られた時期は、鹿角地方一帯で庚申信仰が盛んだった時期と重なる。庚申信仰には修験者の介在も考えられるが、版元の八幡家は修験者の家でもあったとされる。岡田芳朗の初期の研究では、真澄や南谿、武四郎が紹介したような盲経も含めて「これら盲ものが持つ宗教的側面を見落とすべきではあるまい」（岡田1980：32）と指摘されていたが、卓見である。その後の岡田の研究でその点に触れられることはなかったが、再評価すべきことと思われる。

盲暦は、菅江真澄、百井塘雨、橋南谿が最初期に記録した当初から盲心経とともに紹介されていることからわかるように、互いに密接な関係にある。盲心経は般若心経を絵文字で表したものであるが、塘雨が「盲暦に類して一段おかしく、頤を解くに至るもの也」と記している。換言すると顎が外れるほどおかしいということになるが、仏前での読経と笑いの親和性は低い。庚申信仰においては青面金剛などの軸を前に般若心経を唱えることが知られているが、庚申の日は講中で酒食を共にしながら語り明かす日であり、笑いが忌避される場ではない。庚申の夜に人が眠ると体内から抜け出した三尸の虫に天帝へ日頃の罪を告げられ、寿命が縮められることから眠らずに起きていなければならないのであり、笑いは眠気覚ましになるとともに、楽しみながらお経を覚える場になっていたことも想定し得る。

盲心経は文字が読めない人でも絵文字により経を読むことができたと思われがちだが、絵で表されているからといって、独力でそれを読み解き読経できる人は皆無であろう。周囲の人と面白おかしくやり取りする中でこそ習熟が進むのであり、絵文字は記憶の定着にも役立つ。庚申の夜の語らいの中で般若心経を覚えた人もいたのではなかろうか。

盲心経は正徳2年（1712）頃に成立したともされるが（渡辺2012他）、不明な点も多い。ただ、盲暦に先行して存在していた可能性は高く、田山暦が折本形式をとるのは、従来の指摘のように伊勢暦の影響というよりも、折本の経の影響の可能性も考えられる。庚申信仰との関係の中で盲心経が考案され、さらなる民衆教化の一助として創出されたのが田山暦であると見ることもできよう。それ故に前期田山暦は特定暦注優先配置型となり、その中でも庚申の絵文字を最も把握しやすい位置に配置したのである。

庚申信仰に次いで己巳信仰も重視されていたが、巳待ち信仰は全国的には戸隠修験や金華山信仰の関わりの中で分布するものとされる。善八（八幡源右衛門）の前住地が仙台藩の平泉であり、善八と金華山信仰や産金祈願との関係も想起される場所である。尾去沢銅山はかつて金も産出していたことから、そうした点も意識する必要がある。

田山暦全般を通してみると、後期田山暦は前期田山暦に比べて相対的に信仰に対する意識は薄くなり、内容的にも汎用性を帯びてくるように見えるが、甲子の絵文字は前期田山暦の終わり頃に己巳より優位に現れて後期田山暦の期間中存続する。鹿角市の石造物でみると、文政・天保期に甲子待ちの石造物が見られるのと調和的である（表3）。田山暦の中にはそうした信仰の変遷も埋め込まれているように思われる。

おわりに

田山暦及び関連資料を集成の上、分類、比較することで、従来の見解とは異なることもいくつか見えてきた。

時期的には「特定暦注優先配置型」の前期田山暦と、「全暦注日付順配置型」の後期田山暦に大別され、文化13年から天保6年の間にその転換がなされたが、関連資料を介して考えると、文化14年前後に木判の転換がなされ、その後に暦注配置の転換がなされたと推定することができた。

従来、田山暦は文字が読めない人が農耕の目安とするための暦とされてきたが、伊勢暦との比較からは、田山暦は田山の農耕に即したものはなっていないことも指摘することができた。暦注配置のあり方などから考えると、農耕よりもむしろ信仰、とりわけ庚申信仰と強い関連がある暦であることもわかった。

特に前期田山暦においては庚申の日の視認性が高く、文字が読める読めないにかかわらず庚申の日に関する情報が読み取りやすい工夫が施されていた。文盲の人のための暦という見方も見直しが必要となろう。田山には相応の古文書も残されており、寺子屋に関する古記録もある。他の地方と比べて識字率が低いことを示す資料もない。山崎美成が『提醒紀談』で常陸国安寺持方の盲帳の引き合いに田山暦を出していることに現れているように、いわゆる「愚か村」話的な捉え方で文盲のための暦という印象が広く流布した感も否めない。こうした点についてはいずれ論じてみたいと思う。

そもそも近世において暦は統制品であるにもかかわらず、田山では独自の暦を作っていたことになる。稲作に関する主要な暦注などについては頒暦からそのまま取り入れて、文盲の人のために普通の暦の文字を絵に置き換えたただけだと装いつつ、信仰に関わる独自の暦を作ったと見ることもできよう。

田山暦が広く知られる切っ掛けとなったのは寛政9年刊行の橘南谿の『東遊記後編』である。それ以前に写本が出ていたとはいえ、天明6年の満籬館主人の田山暦類似暦や、寛政7年以降の市場通笑による深山暦は版本刊行以前のものとなる。田山暦に対する関心は早くからあったことがうかがわれる。その点において戯作者市場通笑の存在は注目に値する。江戸で大小暦が流行したのは明和以降で、前後するように田山暦が作られ始める。大小暦流行の担い手には戯作者や狂歌師がいたが、その中核にいた太田蜀山人は銅座の役人でもあった。橘雫の俳号も持つ通笑はこうした狂歌、戯作者人脈を通じて田山暦に関する情報を得た可能性はなかっただろうか。今後検討すべき課題の一つである。

また、田山を通っていない南谿がどこで誰から田山暦の情報を得たのかについても気になるところである。これについては京都において百井塘雨から得たものであるとの見通しを持っているが、それについては稿を改めることとする。

註

- (1) 現代において「盲」、「めくら」は表現として適切さを欠く言葉であるが、再古期の菅江真澄の記録以来しばしば「盲暦」、「めくら暦」が用いられてきた歴史的経緯があることから必要に応じて使用した。
- (2) 絵文字が彫られた木製のスタンプであるが、研究史上は「木活」、「木活字」、「木活版木」の用語が使われてきた。「木活」は一般的ではなく、「木活字」は活字を、「木活版木」は1枚刷り用の版木をイメージさせることから、本稿においては「木判」あるいは単に「判」と呼称することとする。
- (3) 一つの面が一つの月を表しており、面を変えることで次の月を表示することができる暦である。現代は

- 月ごとの暦が当たり前であるが、旧暦でそうした例はない。田山暦は日本における月別カレンダーの初例と見ることもできる。
- (4) 『東遊記』、『西遊記』にしばしば「友塘雨」、「我友塘雨」等とあり『笈埃随筆』からの引用も見られる。塘雨と南谿は共に京都に住み、塘雨が廻国から帰京後、遅くとも寛政7年以前までに、南谿は塘雨から様々な話を直接聞いていることがわかる。詳細は別稿に譲るが、刊本刊行前に京都において二人は親しく交流していることや『笈埃随筆』の内容から判断して、南谿は塘雨から田山暦のことを聞いたと推定できる。
- (5) 版本の翻刻本(吉田編1975)には「天明の頃^{寶曆}のよし(原文傍注)」、稿本の翻刻本(佐藤貞夫編2019)には「宝暦の頃のよし」とある。
- (6) 『南部めくらもの之研究』(佐藤1946)において新渡戸仙岳の次の言を引いている。「安政七年即ち万延元年の田山めくら暦の世に伝わるもの実物を未だ見ず。万延申歳鹿角庵従日記に載せたる謄写ものによりて、之を見るのみ。(中略)余大正初年、この安政七年のめくら暦の写しを田山村八幡源夫氏に示したるに、氏は古いことは不明なるが、田山こよみの開板元はこの頃我が家なりき故に、その木活の一半今尚蔵せり、之を模造して送り越さんとして持ち行きしが、月余を経て数部送り来れり。今、二三世間に見ゆるものは、概ね氏の模造せるものなり」
- (7) 岡田は、「嘉永二年の田山暦は稀に見ることができるが、実はこれは複製であって嘉永二年に実用されたものではない。この複製を発案されたのは、郷土史家であり、盲もの研究の第一人者であった新渡戸仙岳翁で、田山暦版元善八の子孫に当る八幡源夫氏に『鹿角日誌』所収の嘉永二年田山暦を示して、これの複製をはかった。源夫氏は同家に伝わる田山暦の木活を使用して嘉永二年田山暦を復元し、これを数部製作して有志に頒けた」とし、複製品の特徴としては、絵文字で表された“たやまこよみ”の標題がつく、甲子、己巳が全て略されているなどが挙げられている(岡田1980)。
- (8) 真澄が大槻家に滞在中に写したもの。明治は後の大槻平泉。長じて仙台藩藩校養賢堂の学頭も務めた。大槻玄沢の従弟でもある。
- (9) 天明6年(1786)の三浦梅園父子の手紙のやり取りの中に「陸奥南部之民不知文字者之所用之曆此地にて翻刻改候ヲモラヒ申候則懸御目候卯ノ年ノ曆ニテ御座候」とあったとされる(渡邊1976:488)。この一文は天明3年の田山暦の翻刻版が出回っていたことを示唆するものである。山片蟠桃が「持来スル処ノ曆」とした天明3年の暦もこうしたものであった可能性が考えられる。
- (10) 満籬館主人は名古屋あたりの人物ではないかとの矢野憲一の示唆もあるようだが(工藤2004)、根拠は明示されておらず詳細は不明である。天明6年以前に田山暦を入手した可能性が考えられるのは現状の資料で考える限り百井塘雨と菅江真澄であるが、天明6年の真澄は東北の旅の最中にある。書き込みに「余が友某回國のをりから」とあることから、塘雨の可能性も考えられるが、検討を要する。
- (11) 市場通笑の没年は文化9年(1812)であることから、寛政期のものが通笑によるものであり、以降は製作が引き継がれたものと推定される。過去帳から書き起こされた通笑の系図を見ると、通笑の甥(安政2年没)が二代目橋雪を名乗っていることから(水野1974)、天保期のものは二代目橋雪によるものと推定される。
- (12) 註(6)及び註(7)参照。
- (13) 第3群の小笠原白雲による模写をもとに佐藤勝郎が盛岡市長松寺の複製木活を使用して昭和20年頃に作成したものであることを佐藤が岡田に教示しており(岡田1980:147)、その木活は同寺住職牟田亮庵が八幡家の木活を模刻したものであった(岡田2004:155)。その住職は昭和12年に田山系めくら心経を版行した人物でもあるが、それは新渡戸が古書店で入手した『東遊記』(ママ)所収のめくら心経をもとに牟田が絵を起し、版木に彫ったものであった(渡辺2012:125)。田山暦の判の模刻もその延長上にあったものと思われる。
- (14) 註(7)参照。
- (15) 後に岩手県県令ともなる島惟精は、明治4年に幹部として着任以来県政刷新に努め、文明開化の恥としてめくら物の処分を命じたとき、明治9年には八幡家に木活の持参を命じ、福岡(現二戸市)の旅館で検

分して、若干の押印をしたとされる。八幡家は宿に木活を預け、後日取りに戻ったところ木活は半分紛失していたという（以上佐藤 1978）。この間、明治4年11月から明治8年11月まで田山を含む二戸郡は青森県に属していたことから、岩手県に編入されてほどなくこの一件があったものと思われる。

発見された暦の年、発見された場所、「若干の押印」を考慮すると、明治9年の紛失に関する一件との関係性を考慮する必要もあろう。

- (16) 天明3年に限らず、全ての時期に広げてみても地火日以外で採用されたのは後期田山暦からの天火日のみである。
- (17) 真日も外れているが、真日は八専の日を示すと自ずとわかるようになっている。
- (18) 文化13年以降きのえね（甲子）が加わる。
- (19) 前期田山暦においては春・秋分が表されるものがある。またその直前の彼岸の入りは常に表される。
- (20) 蛇足庵暦には「王堂図書」の蔵書印が見られる。旧蔵者のものと思われるが、「王堂」はイギリス生まれの日本学者にして言語学者のバジル・ホール・チェンバレン（1850～1935）の号でもある。日本には1873年から1911年まで滞在し、海軍兵学寮や東京帝国大学で教員を務めながら日本語、琉球語、アイヌ語も研究した。この暦もそうした言語学的関心から収集されたものである可能性も考えられる。ただチェンバレンが多用した蔵書印は「英 王堂蔵書」であり、さらなる確認が必要である。
- (21) 蛇足庵暦に節分がないことについて工藤紘一は複雑な解釈をしているが（工藤 2013）、天明3年の節分は正月三日であり、松浦武四郎が記したように田山暦が正月の市日でも売られるのであれば、売った時点で節分が過ぎていたことも想定される。本文で触れたように、年末にベース部分を作り、市日などで注文に応じてカスタマイズするのであれば、過ぎた節分をあえて押印する必要もなかったとも考えられよう。第3群の安永10年暦写しからも同様のことがいえる。
- (22) 2004年7月30日県指定有形民俗文化財となった「南部絵暦 天明三年田山暦」の概要説明（岩手県文化スポーツ部文化振興課 文化芸術担当「いわての文化情報大事典」
<http://www.bunka.pref.iwate.jp/archive/hist433>）
- (23) 五庚申、七庚申に関しての伝承は地域による違いもみられるが、田山では五庚申が凶作、七庚申が豊作と言いつづえられていたことを田山暦の版元の末裔の八幡秀男が記している（八幡 1984）。
- (24) 伝承では善八が平泉を出たのが元禄年間とされ、年代的に整合性を持たないことになるが、庚申塔の銘の明和2年であれば、最古の田山暦の天明3年と銘にある二人の名前は調和的である。田山暦と庚申信仰の関係の深さは暦の作者と庚申塔の建立者名からも裏付けられよう。武四郎の記載には源左衛門の名が見られるが、「源左衛門」は八幡家の屋号でもある（安代町史編さん委員会編 2009）。
- (25) 地域別集計は時期別となっていないことから明治以降のものも含んだ集計となっている。

引用文献

*先行研究に関係する文献は表1に示した。

岩崎均史 2004 『江戸の判じ絵—これを判じてごろうじろ』 小学館

岩手県教育委員会編 1980 『鹿角街道』 岩手県文化財調査報告書第46集 岩手県教育委員会

岩手県立博物館編 1987 『安代の自然と文化』 岩手県立博物館 安代町地域総合調査 岩手県文化振興事業団

鹿角市 1986 『鹿角市史 第二巻（上）』 鹿角市

鹿角市史編さん室 1990 『鹿角市の石造物（石仏・石碑）』 鹿角市

佐藤貞夫編 2019 「鹿角日誌」『鹿角日誌・壺の碑考』 松浦武四郎記念館

豊橋市美術博物館編 1999 『菅江真澄展』 豊橋市美術博物館

練馬区立石神井公園ふるさと文化館編 2016 『なぞなぞ？ことばあそび!! 江戸の判じ絵と練馬の地口絵』
練馬区立石神井公園ふるさと文化館

水野稔 1974 「市場通笑伝—後裔からの発言—」『近世文藝』23 日本近世文学会

八幡秀男 1984 『だんぶり』 だんぶり社

引用オンライン画像

国立国会図書館「盲暦張交帖（享和2年（1802）田山暦）」

https://www.ndl.go.jp/koyomi/chapter2/img/img_s4_01.png

早稲田大学図書館古典籍総合データベース「東遊記 後編」

https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru03/ru03_00475/ru03_00475_0003/ru03_00475_0003.pdf

早稲田大学図書館古典籍総合データベース「宝暦甲戌元暦 天明3年」

https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ni05/ni05_02199/ni05_02199_0033/ni05_02199_0033.pdf